

Ⅱ

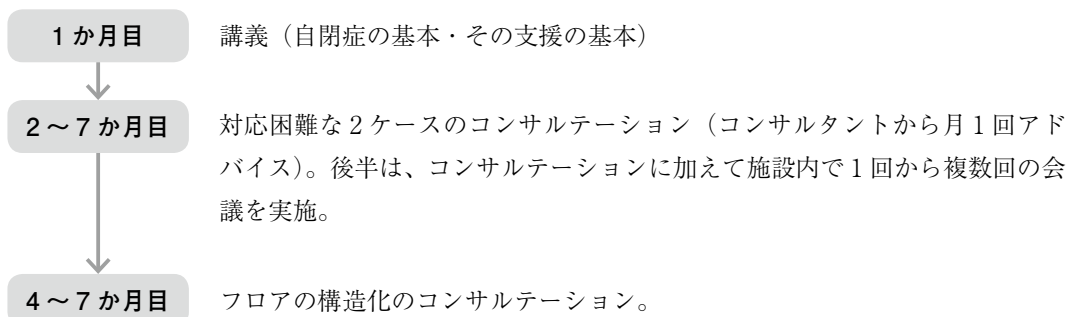
施設訪問コンサルテーション事例

障害者支援施設／生活介護

ねらい・背景

利用者の人権侵害問題が発生したことを契機に、組織の改編や職員研修を行い支援内容の見直しと職員の意識改革に取り組んでいた。しかし、自閉症や広汎性発達障がい、さらに強度行動障がいを伴うような利用者の支援には専門性が必要であり、施設内だけでの取り組みには限界を感じていた。また、施設の構造上の問題から生じる課題もあり、ソフト面だけでなくハード面の整備も必要と考えられた。

流れ



Case

1-1

フロアの構造化

1. 利用者主体のレイアウトへ

一番問題となっていた2階男性利用者のフロアの構造を変更すべく、利用者の動線・問題・レイアウトについて具体的なアドバイスを受け、利用者の生活しやすいフロアのレイアウトを作っていた。

特にレイアウト変更に際しては、一度に大きく環境が変わるということもあり、利用者のみならず職員の混乱も予想された。そのため、ひとつの大きなプロジェクトを実行に移すにあたり、綿密な計画とそれに伴ったマニュアルが必要なこと、またそのポイントについて具体的なアドバイスを受けた。

2. 構造化前の2階フロアの状況

2階フロアの問題は利用者の動線が重なることであったが、原因は利用者がフロアの真ん中1箇所に集まりやすい環境になっていた点にあった。

- 2階フロアは自閉的で重度の障がいがある利用者が多くを占めていた。言葉によるコミュニケーションが難しいため、大半の利用者は日課の流れや次の活動内容を職員や周りの利用者

の動きを見て判断していた。次の活動の道標となる職員がいる支援員室がフロアの真ん中付近にあったため、多くの利用者が支援員室の前に集まることとなった。

- 利用者に提示しているスケジュールも支援員室近くの壁に掲示していたために、その確認のためにも利用者は支援員室の前に集まっていた。
- フロアの真ん中に唯一のテレビを設置していたのでテレビを見るためにも利用者はフロアの真ん中に集まっていた。
- フロアの真ん中に大きなテーブルを置いていた。フロアが平坦で視界を遮る物がないため、そのテーブルからフロア全体を見渡しやすかった。そのためテーブルの上に座ったり寝そべったりして支援員の動きや利用者の動き、スケジュール、またテレビを見るために利用者が何人も集まっていた。

同時にフロアはだだっ広く、目的をもって場所を設定していなかったため、テレビを見ている人もいれば寝転んでいる人もいる。廊下で寝ている人もいれば、本を読んでいる人がいたり、字を書いている人がいたりと様々な場所で利用者が様々な生活をしていた。

3. レイアウトを考える

まず、2階のフロアの中でどのようなトラブルや問題が起きているのかの分析を行なった。そして、そのトラブルの原因となっている物、人、場所などを考察した。

レイアウトを考えるにあたり、フロアで誰がどのあたりにいてもらうのが適切かを考えた。トラブルになっている人がどうすれば、フロアの中で離れて行動し、刺激しあわずにすむのか。そしてその場所に定着してもらうにはどのような取り組みやアイテムが必要なのかを考えた。

また、場所ごとに目的を持たすためにはどのような物があるのか、利用者の動線が重ならないようにするにはどのように構造化を図ればいいのかを考えた。

その結果、利用者が1度に1か所に集まらないように仕切りを設けたり、日課の流れややり方を変えることにした。マットや椅子を置いて場所に目的を持たすとともに、利用者がそこでくつろぎやすい環境をつくることにした。刺激し合っている利用者が離れて過ごせるようにテレビの台数を増やして離して配置したり、対象となる利用者が興味を持っているものを用意することにした。

4. 実行に向けての計画を立てる

レイアウトやマニュアルを考えることと同時に大切なのは導入のタイミングである。大幅な変更を行うにあたり、いかに混乱なく変更を行えるかを考えた。

まずは日程を考えた。利用者が見ている前で行うと、物の位置にこだわる人がいたり、触ると危険な工具を使うことになるため、利用者が最も少なくなる盆帰省の期間に行うことにした。そして実行日が確定すると、その日に向けて職員の勤務を調整した。当日スムーズに仕切りなどの設置ができるように物を作る日を調整したり、買い物に行く日などを設定した。

また、当日はどの職員が必要か、実行した次の日はどの職員がいればスムーズにいくかなど話し合い勤務の調整を行った。

次に当日の計画である。まず、その日の利用者一人一人の予定を一覧表にまとめた。そして残っている人の活動等を考慮して、何をどのタイミングで動かすかなども細かく決めた。例え

ば上記のフロアの真ん中にあるテーブルはこだわる人もいたので、こだわる人が散歩に行っている間に移動した。その時、散歩に付き添う職員、テーブルを動かす職員、周辺の見守りをする職員など細かく役割を決めた。

そして、次に考えたのは利用者ごとに想定した落ち着くべき空間への誘導や好むと思われるアイテムなどの導入である。どの職員がどのタイミングでどのような方法で対象となる利用者を誘導し、ルールなどを説明するかを決めた。

そして各利用者の特性を考慮して誰がどのような反応をするかも考えて、もし問題となる行動が起きた時には職員がどう対応するかマニュアル化した。

5. 実行した後

実行した後のルールを決めた。何か不具合を感じても、職員が各個人の判断でルールを変更したり物を移動することは禁止した。それは、全員で正しく評価をとるためである。

そして10日後に会議の場を設定してそこで話し合いを行い、変更が必要なところを改善した。

また記録も普段の記録用紙とは違った別の様式を作成した。それは構造化に関したもののみの記録で、そこには構造化による影響と思われる事項や新たな取り組みに対する利用者の反応、アイテムを使った利用者の反応を記録した。それをもとに今回の構造化の評価を行い会議で話し合った。

6. 実行後の利用者の反応

帰省している間に大幅な環境の変更を行ったことで、もどった利用者の中にはきょとんとする人もいたが、不穏になる人はいなかった。そして事前に決めていた通りに利用者を決まった空間に誘導してルールの説明を行ったため、ほとんどの利用者がこの環境の変化を受け入れた。

ふりかえり・まとめ

コンサルティング事業はeサービスのコンサルタントの助言を得ることが大きな目的であり、今後の支援の軸となるものであったが、何より職員の「考えて実行に移す」「継続して支援を行う」「記録に残す」「客観的に見る」という、当たり前であっても難しい職員としての姿勢を再認識する機会となった。

学んだこと

①自閉症および広汎性発達障がいの特徴（基本的な知識）

A施設では、事件前から在籍する職員だけでなく、新たに入職した職員も専門的な知識に欠けていた。専門的な知識を改めて具体的に学び、利用者の行動について客観的な視点を持つように心がけるようになった。

②PLAN→DO→SEEの基本とその大切さ

その場しのぎや主観的な視点でしか見られなかった利用者への支援を、少しずつ客観的なもの、継続できるものに変えていっていたが、まだまだ不十分であった。ケースの支援では評価→計画→実行→再評価のプロセスを通した支援を経験し、またチームで継続して実践する大切さを学んだ。実際のケースを通して行ったことで、成功も失敗もリアルに感じる事ができた。今後は他

のケースにどう活かしていくか、施設内でこのプロセスを継続できるシステム作りが課題となっている。

③環境を利用者に合わせるのではなく、利用者のニーズや状況に環境をあわせる

フロアのレイアウトを見直した際、いかに職員主導のレイアウトになっているかを実感した。利用者主体のレイアウトに変更していく中で、誰のための生活の場であるかを職員間でも確認できた。改善を継続し、いずれはユニットを含め利用者の生活空間の改善に努めていきたい。

④マニュアル作成のポイントと大切さ・計画の立て方とポイント

レイアウト変更の際はマニュアルの必要性和ポイントを教えていただき、また、会議の進め方・書類の作成方法・管理職としての仕事の進め方など、多岐に渡り助言を受けた。

手探りで施設運営を進めてきた職員にとっては、大きな力となった。

今後に向けて

利用者・家族・職員の関係の中で少しずつ改善されているのは、「小さなことも隠さない」「気になることはできる限り言葉にして伝える」という気持ちだろう。実際に利用者・家族・職員の関係性の中で気持ちを全て話せているのかと問われれば難しいところではあるが、家族のニーズや苦情がダイレクトに職員に伝わるようになってきている。

利用者においても、意思をはっきり伝える人が増えてきている。反面、言葉での表現が難しい利用者においては問題行動という形で表現され、対応に苦慮していることが多々あるのも事実である。どのようなケースでも利用者・家族のニーズを汲み取り、施設として精一杯の対応を心がけ、当施設が利用者・家族にとって居心地のよい、また職員にとっても働きやすく、仕事に対して前向きに取り組める施設となるよう、今後も努力し続けていきたいと考えている。

多機能型

ねらい・背景

自閉症と呼ばれる利用者が増えてきたこともあり、コミュニケーションのとりにくさや、パニックなどによる自傷・他傷行為のある利用者たちへ今後どのように支援していいものか悩む機会が増えた。それに対して私たちができること、すべきことに取り組むきっかけができればと思い、コンサルテーション事業を受けて支援の見直しに取り組んだ。その後も、対象を他の利用者にも広げている。

流れ

1 か月目

施設の案内と今回取り組みたい4ケースをコンサルタントに説明。

2 か月目

取り組む4ケースについて、利用者自身と周囲の環境の現状を把握。
保護者からも情報収集し、見直した内容で支援を実施。

3 か月目～

コミュニケーションの評価、支援の実施。

Case

2-1

自傷・他傷あり、作業の参加不安定 >>> スケジュールを見直しカード導入

Aさん、男性、20歳代。自傷・他傷あり。会話はオウム返しが多いが文字の読み書きはある程度可能。作業についてはその日の調子によって参加できないことが多々ある。

1. Aさんの理解と取り組み内容

コンサルタントにAさんのパニックの状態のビデオと現在の生活記録を見てもらい、当面の取り組みを決定。

- ①詳しい個人情報支援の参考にするため、「利用者情報シート」をAさんの母に記入してもらった。
- ②生活記録はシンプルな書式に変更。パニック時の状況などは、別紙に記入することにした。
- ③パニック時に落ち着くための場所を決め、「イライラしたら移動する」ことが視覚的にわかるように、いつも目にする定位置の机に貼り出した。
- ④作りかけていたスケジュールを完成させた。

2. 1か月後の経過

パニック時の場所移動は、初めは抵抗もあってか怒ったり抵抗したり拒否することがあったが、「イライラしてるみたいだからベンチに行ったら？」と声をかけるとスムーズに移動することもあるようになった。

ベンチで過ごす際には、Aさんに「何時に戻る？」と尋ねて時間設定してもらおうと10分後などの短い時間設定をするので、職員が30分後程度の時間設定をしている。その時間内に戻れないこともあるが、戻れない時も強制せずそのまま様子をみて設定時間を延ばすようにした。それまでに機嫌よく戻ってくることもある。大きな自傷行為も減ってきた。

3. 行動分析

記録から行動を分析すると、パニックが施設休所日の土日にも起こっていること、平日ならば午前中に多いことが生活記録表から読み取れた。スケジュールがわからない（見通しがたたない）ことに不安や緊張が出ているのではないかと。したいことや予定がたくさんあり、それに追われて不安やあせりになっているので、こちらでそれを整理しながら時間管理をしていく必要がある。

Aさんにスケジュールを任せると増えすぎて消化できず、それがいろいろたまってパニックの引きがねになりうるので、スケジュールはパターン化したほうが過ごしやすいただろう、とコンサルタントが指摘。そこで、午前の活動内容・午後の活動内容を提示したスケジュール表（下・右）を用いて、不安や緊張を取り除いていくことにした。



A さん	
月 日 ()	
午前	写真、文字
昼食	給食 (メインの写真でもよいがたくさんありすぎるので給食でいく)
午後	写真、文字
コミュニケーション・注意事項など	
いろいろした時はベンチへ	お茶をのみたい
	トイレに行きたい

Aさんの母と面談し、パニックが長くなっていること、パニックは小学校終わり頃から始まったこと、天気予報を毎日ビデオに録画して観ていることがわかった。

コミュニケーション面では、あまり意思表示をすることがなく、外出中トイレに行きたくなったら突然走り出すなど、びっくりすることがよくある。Aさんから職員への関わりも、手や腕を握りにいたり、にこにこ笑顔で顔を近づける程度で、会話もオウム返しが多いので、スケジュール表の下にコミュニケーションカードを入れ込んだボードにして、常時持ち歩けるようにした。また、活動内容もカード化した。

4. スケジュールカードの導入

カードを作業中も目につく位置に置き、移動の際は必ず持っていく習慣が、定着しつつある。作業中に「ください」などの声かけを自発的にスタッフにしてくれるようになってきた。

コミュニケーションのほうは進んできたが、スケジュールの活用が定着したとはいえない。

パニックも解消されておらず、イライラした時はベンチへというのも嫌がることが多い。

コミュニケーション評価で、絵カードを見せて「好き」「嫌い」を答える設問でベンチのカードに「嫌い」と答えており、「ベンチ＝だめな時に行くところ」と思っているよう。パニックになりそうな時は「休憩する」ことを覚えてもらうようにする。

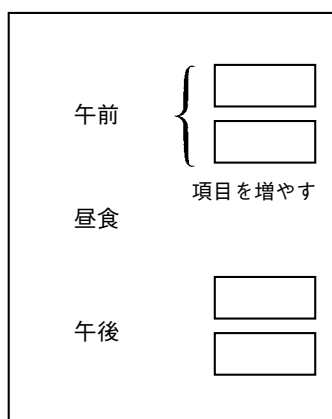
休憩を意識できるように、午前の活動の中にも休憩というカードを入れた。また、予定が終わるとカードをはずしていく工程を入れることにした。

スケジュールボードも、欄を変更（右）。休憩は決まったイスでとり、タイマーなどを使って時間を確認するように進めた。

5. 結果

パニックについては現在も原因の特定ができないが、ひとりで落ち着ける場所を作ったことで立ち直るのに要する時間が少し短くなってきているように感じている。またコミュニケーション面ではとても効果が上がり、トイレ・お茶で突発的な行動が減った。

それ以外では、コミュニケーションカードに「ください」「一緒に」を入れたことで作業中にも「〇〇さん、△△をください」など話しかけてくれることが増えた。今後も徐々にカードを増やすことを検討している。



Case

2-2

外出不安 >>> スケジュールの提示と変更の工夫

Bさん、男性、20歳代。

施設内では特に問題なく行動できるが、外に出る時が不安で仕方ないようで外出が楽しめない。10月の旅行に向けて、少しでも楽しめるようにしたい。

当施設では大きなパニックになったことはないが、家では執拗なほど母に話しかけたり、パニックが起きそうで薬で対応していることが多いという。旅行を休むことを毎日スタッフに確認し、言った後には笑っていることも多い。

1. 取り組み内容

時計を意識するように、アラームをならして行動を促してみたが、うまくいかなかった。

写真カードで予定の流れがわかるスケジュール帳を作り、常に持ち歩いてもらってはという助言をコンサルタントから得た。写真カードをリングで留めて、めくっていくとスケジュールがわかり、最後は家に帰るカードが出てくるものを作成した（右）。



2. 経過

リング式カードを使った結果、「にっこりの時間」にジグ・休憩・ジグ・休憩などをカードの順にこなすことが自然にできた。外出にも利用してみたが、自分でめくって確認もするが口頭で確かめることが多く、カードの意味をBさんがどこまで感じているか疑問が残った。

コンサルタントからは、リング式カードを使ってはいるが、人を頼ることで不安を解消しているのでカードの有効活用ができていないという指摘があった。

〈スケジュール提示についてのアドバイス〉

- ①「カードAの次はカードB」
- ②上から下に順番。
- ③半日のスケジュールと1日のスケジュールを明確にして、終わったらチェックオフ（消していく）。
- ④カレンダーで、「あと何日」を明示。
- ⑤リング式カードについては、その場その場で確認を促す。何通りかのリング式カードを作っておく。

〈今後に向けたアドバイス〉

- ①「好きなものを見つけよう！！」

折り紙・パズル・音楽・塗り絵・シール・はさみ・のりなどを置いておく。

- ②「休憩」への理解を高める

何をして過ごしていいのかわからないようなので、本・ラジカセなどを置いて、座って待てるようにする。

- ③日めくり式カレンダーやデジタル時計を使えるようになる

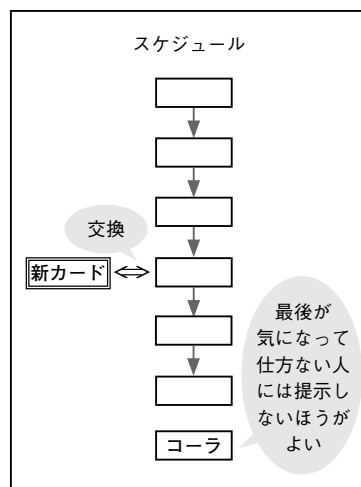
デジタルの時計を設置しておき、その前にカードを広げておく（マッチング形式）。

4. スケジュール変更への対応

健康診断で、事前に知らせるよりも直前に伝えた時のほうがスムーズに動き、パニックが起きることもなかった。外出についても、2回目のプールは時間が短かったこともあってか落ち着いており、ボールで遊ぶ姿なども見られた。

コンサルタントによると、「スケジュールを提示するタイミングはとても大切で、事前の知りすぎ・伝えすぎ・与えすぎは『変更』が苦手な人にはしんどい」。スケジュールは、直前に単発のカードを提示して写真の意味を伝え、その場その場で自分で確認するように促すことにした。

変更の連絡は、早すぎるとよくない人には直前に提示する方がよく、またスケジュールには変更の可能性が常にあるので変更への対応を練習する必要がある。変更についても、カードを使って示すことにした（右）。



何よりも感動したのは、前日の余暇活動で好きな映画の動画をパソコンで観て過ごしたAさんが、休憩時間になると「〇〇さん、パソコン使ってください」と言いに来たことである。まずそのことに驚きと喜びを感じ、使いたいのだなと思って「どうぞ」と返事をするが動こうとせず、もう一度「使っていいよ」と言うと、やはり動き出さずにしばらくして手をひっぱり「一緒に」と口を開いた。インターネットで動画を立ち上げる方法がわからなかったのだ。

そんなことも今までは伝えられずにいた彼は、どれだけイライラしたり腹が立つことも多かったことだろうと思う。まだたくさんすべきことがあるのだらうと、日々思案の毎日である。

自閉症の理解が深まり、自分達が取り組んでいく課題について考える機会となった。ツールの例もたくさん教えていただいたので、作っていきたい。今回のコンサルテーション事業の内容をまたふりかえって、課題設定をする。評価手法のポイントや特性の導き出し方などわからないことも多いので、また研修なども行っていきたい。

生活介護

ねらい・背景

自閉症スペクトラムの利用者が何人かいるが、日々の支援を行うに当たって個別のきちんとしたプログラムやスケジュールができていない。全てにおいて手探り状態で不安定な状況が各所に見受けられる。

興奮し声を上げながら跳びはねる。他の利用者がその声を聞いてさらに不安定になる。時には職員への他害に及ぶこともあり、そのため具体的な対応方法や環境調整を学びたいと考えた。

流れ

1 か月目

コンサルタントに今回取り組む3ケースの利用者の活動場面を見てもらい、現状説明と今後の検討を行った。

各利用者のアセスメント不足の可能性があるということで、3ケースの利用者の情報シートに、施設とご家族それぞれが記入。ご家族に記入してもらったことで、新たな発見もあった。

見直した支援を実施。

2 か月目

第2回のコンサルテーションで、各利用者の情報シートを分析。その後活動場面を見学してもらう。

実施課題計画書を作成し、試行。

2 か月目～

支援の実施と月1回のコンサルテーション。

5 か月目

新入所受け入れ時の注意点についてアドバイスを受ける。

Case
3-1

実施課題計画書を使い、PLAN-DO-SEE

Cさん、男性、20歳代。療育手帳A判定、障がい程度区分5。自閉症。

支援学校高等部卒業後から利用。発語はほとんどないが、食べたいものやほしいものがあるときは言葉での訴えがある。文字を書く、読むことが好き。写真、絵カードの理解はある。当時、飛び跳ね行動、奇声が多く見られ、作業中の居眠り、日中の無断外出があった。不安定な時は、顔をたたきといった自傷行為が見られた。

1. 実施課題計画書の作成と試行

第2回コンサルテーションでアドバイスを受け、Cさんのスケジュールと手続きについて実施課題計画書を作成した。

〈アドバイス〉

- 同じことをやることで落ち着く人もいるが、活動が少なすぎる。活動のバリエーションを増やす。自立課題の引き出しを増やしてはどうか。
- 現在やっている活動（作業）が本当にCさんに合っているか、わかってやっているか、本当に文字が読めているか、理解しているか等に職員自身が気づけるように。セルフモニタリングを実施しては。
- スケジュールが煩雑。シンプルなルールを作成する。場合によっては、次の行動だけを示す。
- 評価が止まっており、進んでいない。ひとりで確認するのは難しいので、他の職員との視点で共有する。それが評価をする練習にもつながる。
- 仮説を立てて、Cさんの様子をみてチェックする（PLAN-DO-SEE）。

1週間ほどのスパンで、何パターンか試した。職員間で、視点を共有した。

2. 部屋のレイアウトとスケジュールボードの変更

横並びだった机を前後に動かして、作業（活動）エリアと余暇（休憩）エリアをより明確にした。

また、スケジュールは今まで職員がその都度「時間」を書き込んでいたが、活動終了時にCさんに「○」をつけて確認してもらい、終わりの部分の強化を図った。

第3回コンサルテーションでは、「以前に比べてシンプルになっており、Cさんもわかりやすくなっているのでは」と言っていた。実際にCさんもスムーズに動いている。

変更の際に用いた実施課題計画書をもとに説明し、アドバイスを受ける。

Case

3-2

PLAN-DO-SEE の練習

Dさん、男性、20歳代。療育手帳A判定、障がい程度区分5。自閉症。

支援学校高等部卒業後から利用。簡単な文字、話し言葉はある程度理解でき、本人からも訴えがある。CMや電車のアナウンスのコピーが得意である。写真、絵カードの理解はある。

気に入らないことがあると、大きな声を出して叫ぶ。自宅では、夜に外に向かって大声を出し、母親が注意すると母親の足をつかむなどの粗暴行為が見られる。トイレで便を手で触って遊ぶ行為が見られる。

1. PLAN-DO-SEE の練習

第3回コンサルテーションで、今後の支援にも生かせるよう PLAN-DO-SEE の練習をDさんを対象に進めることになった。コンサルタントにDさんの現状を伝え、まずは午後の時間帯に

スケジュール導入を図る。

実施課題計画書、スケジュールを示すツール、記録の様式、Dさんの簡単なプロフィールを作成。コンサルタントのアドバイスを受けながら、次月から実施できるよう準備を進めた。

2. スケジュール、作業、休憩

スケジュールの提示は、上から下に見ていくスケジュールを採用した。以前は写真の提示で上から下に時間の流れを示していたためである。

作業の終わりを明確にするため、作業で使う袋がなくなると赤いカードが出てきて、スケジュールに戻る手がかりになるようにした。余暇は、Dさんと話し合っって好きなものを出し合い、Dさんが好きそうなことを行うことにした。

3. その後の見直し

Dさんの余暇と作業の場面に、新たにビデオを取り入れた。

コンサルタントに「今後作業が増えていった場合どうするのか。作業機のマッチングボックスが増えていくのではないかと尋ねたところ、「一般的にはワークシステムを使用するのが理想である」とのことだった。

〈アドバイス〉

スケジュールを使って落ち着いているなら、なぜ落ち着いているのか、どこがよかったのかなどを職員で話し合う。

- よかった点は、トイレ支援など他の支援にも生かせる。例えば、上から下のスケジュール提示がよかったのかもしれないので、トイレも上から下に提示してみるなど、Dさんが理解できる方法を考えては。
- できていないことをできるようにするのではなく、正しいやり方を伝えるのも大事。

Case 3-3

他害への対処 >>> アセスメントが重要

Eさん、男性、30歳代。療育手帳A判定、障がい程度区分6。自閉症。

支援学校高等部卒業後から利用。発語はほとんどないが、拒否の時だけははっきりとした口調で「イヤ」と言う。写真、絵カードの理解はある。

本人が不安定な時や嫌なことがあると、年に数回、他害（噛むこと）がある。基本的には拒否の姿勢から入り、一度拒否すると絶対にやろうとはしない。

1. 他害について

〈アドバイス〉

- 他害面もあるが、実施した結果どのような行動になるか予想が立てにくい。そのため、職員間で十分な話し合いをして、実施する時も職員の数をプラスし、対応できるようにする必要がある。

- 重度の人の支援の場合、実際に支援に入るまでにアセスメントだけで1年をかける例もある。それぐらいしないと見えてこない人もいますので、アセスメントには時間をかける必要がある。
- 他害が出た時の対処は、職員間で統一する。他害をするEさんには、今は何をする時なのかを伝える。戻る場所も必要。

新入所受け入れ時の注意点（第5回コンサルテーション）

〈アドバイス〉

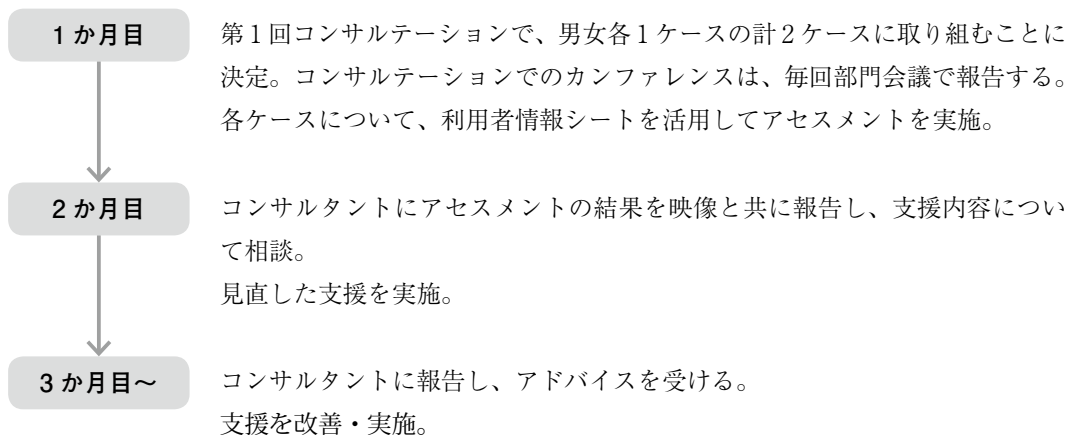
- 目的を明確にする。
- どこまで自立してもらうか。
- スケジュールは必要か。
- 休憩場所・仕事場所・昼食場所を確保するのも大切。
- コンサルタントの施設では、1日のスケジュールを細かく書き出し、シミュレーションを行い、前もって行った聞き取りとすり合わせていくことで動きを明確にしていく。
- 本人の不安を軽減する。

障害者支援施設／生活介護

ねらい・背景

自閉症スペクトラムの利用者の割合が比較的高く、支援の困難性を多く抱えている。そのため支援現場の環境整備に取り組み始めたところで、コンサルテーション事業の助成があると知り、ぜひ受けたいと考えた。

流れ



Case

4-1

こだわりから利用者間でトラブル >>> スケジュールの見直し

Fさん、女性、30歳代。自閉傾向があり、物の位置や向き、物事の順序に強いこだわりが見られる。禁句や制止動作には強い拒否が見られ、他傷や自傷に至ることがある。

発語はなく、言葉によるコミュニケーションは困難である。意志表示は、ジェスチャーや実物の提示で行われる。

1. 取り組み内容

第2回コンサルテーションで、新たに計画する支援に取り組む時間帯を7:30～10:00とした。場面を限定したのは、職員自身がしっかりとした取り組みを行った経験に乏しいため、確実に支援を提供するにはある程度時間帯が決められているほうが確実にできるからである。その中で、その人にどのような生活を送ってほしいと思うのか、またそれらを職員の共通認識として持つことが大切であり、そのためには常にチームで取り組むことというアドバイスを受けた。

日常生活の中でのこだわり（気になっていること）が各所に見られ、利用者間トラブルに発

展することが多く、双方に不快感があったため、することのない時間帯にはアセスメントで得た情報の中から新しい活動やお手伝いなどを組み込んだ。こだわりについては、他の利用者とトラブルにならない程度の距離や位置関係を配慮して、活動として取り組む時間を設定した。

2. 経過 1

変更が非常に苦手なため、開始当初は大きな混乱が見られたが、経験を重ねるごとにスケジュールを使った生活が浸透し、落ち着き自立して過ごせるようになった。

取り組み始めた時にはスケジュールの流れをどうしても受け入れることのできない箇所や理解することが難しい箇所が見られ、それが混乱の要因であると推測されたので、Fさんが過ごしやすい流れになるよう、その都度スケジュールの内容を変更した。その結果、全体的に他の利用者とのトラブルが格段に減少し、大きなトラブルは少なくなってきた。

コンサルタントからは、流れが固定化しやすいというFさんの特性上、流れは日替わりにして変化に慣れていくことも必要というアドバイスを受けた。

3. 経過 2

その後、トイレに一定時間こもってしまうことが見られるようになった。これは、取り組み開始以前にも見られていた行動だが、開始当初はほとんど見られなかった。排泄のために入っていることもあると思われるが、そうではなく何かを待つために自室ではなくトイレで待っている可能性があるようにも見受けられた。

コンサルタントからは、することのない時間になってしまっているのではないかというアドバイスを受けた。また、スケジュールカード入れを気にしたり、活動として提供しているごみ集めの袋を気にしたりなど、細かい点も課題として挙げていたが、コンサルタントからは「ある程度はFさんのやり方も受け止めることが大切である」とのことだった。

Case 4-2

することのない時間が多い>>> エリアを分離、カードとタイマーを活用

Gさん、男性、30歳代。破衣行為、物品等の破壊行為、水道水の多飲、盗食行為、奇声等の行動障がいがあり、落ち着いた生活を送ることが困難な状況である。突発的な行動から、怪我をする危険性が高く、安全に生活できる環境設定が必要である。

発語は限られた単語のみであり、言葉によるコミュニケーションは困難である。

1. 取り組み内容

新たに計画する支援に取り組む時間帯を、10:00～15:00とした。

Gさんはすることのない時間が多く、作業への意欲はあまり感じられないため、作業へのモチベーションを高めるきっかけとして、強化子（鉛）を取り入れてみた。また、活動内容と場所をわかりやすく提示するため、1つの場所では1つの活動しか行わないようにした。周囲の聴覚・視覚的な刺激にも影響されやすいので、特に集中して取り組んでもらいたい作業エリア

についてはパーテーションを活用し、刺激を軽減するようにした。

スケジュールの提示については、長すぎる提示を理解するのが難しいと評価し、作業・休憩という流れを基本として、1日の中で5回行うようにした。作業内容は自立課題を中心としたが、受注している作業を意識した課題も取り入れた。

2. 1か月後の経過

各種の活動には以前より集中して取り組むようになったが、一部の作業課題については最後まで取り組めず途中で終わろうとしたり、失禁してしまうことが見られた。コンサルタントからは、作業量の調整をしてはというアドバイスを受けた。

休憩時間については、落ち着きがない状態が続き、その都度職員が対応することが続いた。コンサルタントからは、他の活動は「なくなれば終了」であるが、休憩時はDVDを観て過ごす設定になっており、終わりのきっかけが職員というような違いもあるため、見通しが持ちづらいのではないかとアドバイスを受けた。

その他、トランジションカードを用いていたが、このカードを取れないこともあり、スケジュールのカードとトランジションカードの区別が付きにくいかもしれないため、はっきり区別できるものに変更してはというアドバイスを受けた。

3. 3か月後の経過

その後も引き続き、休憩時間を過ごす際に失禁や落ち着かない様子が見受けられた。時間の流れが理解できるようにタイマーを使用し、どうなったら終わるのかを理解できるように提示していくことにした。

昼食後の作業ではフロアに出てくることが多く、作業に集中できていない状況がある。それは、他の利用者の食事が気になるのではないかという仮説を立て、作業よりも積極的に取り組んでもらえる家事活動などに変更した。

〈支援を継続していく上で大切にすることのアドバイス〉

- 日中・生活それぞれの職員が前向きに協力し合えるような工夫をする。
- 問題行動への対応については、原因はひとつではないこともあるため、常にいろいろと探りながら行っていくことが大切である。

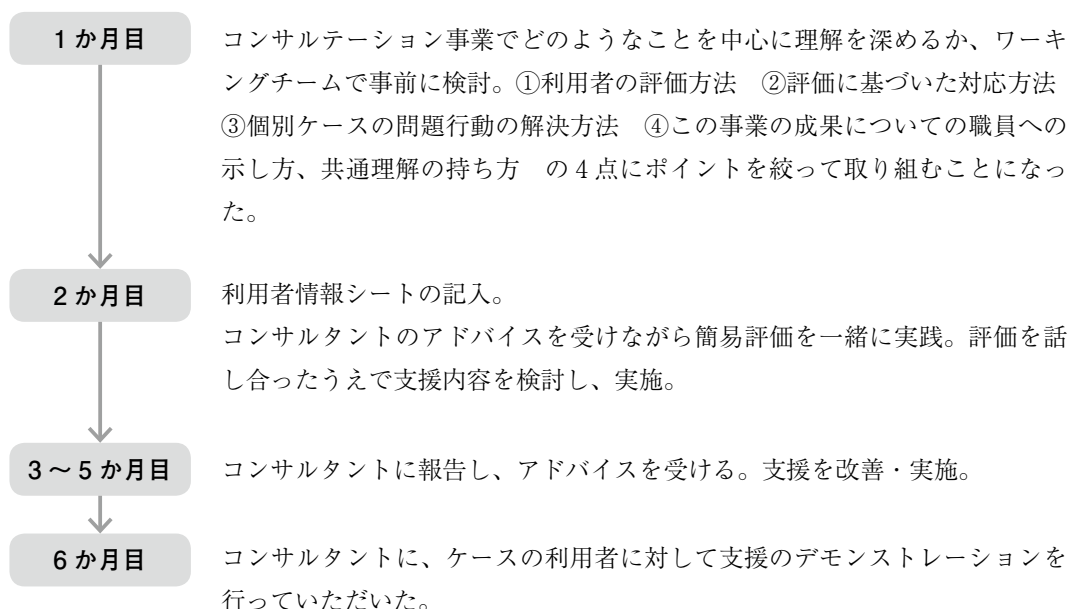
障害者支援施設／生活介護

ねらい・背景

利用者の個別支援について多くの課題があり、強度行動障がいのある利用者の中には適切な支援方法が見つからず、行動制限という形に頼らざるを得ないケースもあった。人権擁護、虐待防止という観点から、この状況を変えるのは当然のことであり、コンサルテーション事業に申し込み職員4人のワーキングチームを立ち上げて、コンサルタントの指導や助言を受けながら取り組みを進めた。

利用者の支援を考える時、その利用者の得意なこと、苦手なことなどを知る必要がある。しかし、当施設では、それを見つける方法の一つである「評価」が、誰もがわかりやすい形として行われていなかった。今回は、客観的な評価を行ったうえで支援を検討して実施するようにした。

流れ

Case
5-1

衝動性が高くパニック >>> 本人評価から自立課題を用いたワークシステム導入

Hさん、女性、30歳代。療育手帳A判定、障がい程度区分6。自閉症。
「ごはん」「おふろ」のような日常的な単語は少し理解でき、1日の日課などは経験の積

み重ねで理解するが、時間の概念がなく自分が楽しみな活動を前倒しにして要求しがちである。したい行動は直接行動で示す。飲水等に強いこだわりがあり衝動性が高く、多飲水行動によるパニックや、粗暴、自傷、異食等の問題行動がある。コーヒー、おやつ、入浴と、なわとびのような紐状のもので遊ぶことが好きで、嫌いなことは、行動を制止されること、待機時間が長く見通しが見つからないこと、ことばでの指示や注意など。

問題行動は同じ場面でもくり返され、また他の場面でも違った形の問題行動となる。制止されるとさらにイライラする。女性の職員では制止できなくなると複数の職員での支援となり、さらにHさんのストレスがたまりイライラがつのる。それをくり返す期間が、春先から秋ごろまで続く。少し落ち着いた状態が続いても、やはり何かのきっかけで表れ、くり返される。ここ1年半、このような状態だった。

1. 利用者情報シートの記入

Hさんがどんな人なのか、得意・不得意、好き・嫌いなどを知るため、コンサルタントの指導で利用者情報シートを記入した。項目は、対象となる利用者の①所属している学校、施設、作業所等の概況 ②過去3年間におけるHさんの所属先の変化 ③現在の所属先でのHさんの適応状況 ④Hさんの現状の評価 ⑤生活の様子 ⑥将来の展望 などである。

2. 簡易評価

簡易評価は、課題に取り組んでもらい行動観察するものである。「言葉や文字、色、形、数字、時計などをどの程度理解できているか」「細かな作業、道具を使うことができるか」「集中時間はどれくらいか」などをみて、①技能的にできること、できそうなことは何か？ ②得意なこと、苦手なことは何か？ ③どのようなことに興味関心を持っているのか？ 好き嫌いはあるか？ ④課題の内容や支援者の指示をどのように理解しているのか？ など確認する。

取り組む課題は、ペットボトルのキャップを箱に入れる課題、標識カード（男女トイレ・非常口・とまれ・お手伝い）を使った課題、おもちゃのブロックを写真どおりに組み立てる課題、「たべる」「のむ」「ねる」「なく」の文字カードをそれが意味するイラストのところに置く課題、トイレの声かけに対してトイレの絵を指す課題など、多種類である。課題を終えた後は、評価時のビデオ映像を観ながらコンサルタントとディスカッションした。

Hさんは、①素直な人で柔軟な対応ができる人、②課題が好きでがんばれる人、③待つことはできるが、待つ間の自分の過ごしがない人であり、「写真は理解できそう」「ものをみて、ものに反応して行動している、見えると衝動的に動く」「他のものに意識がいきやすく注意を向けるのに工夫が必要」という特性があることがわかった。

2. 取り組み内容

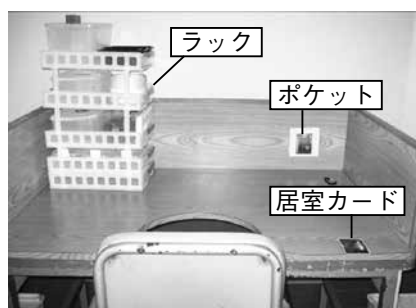
①自立課題を用いたワークシステムの導入、②ワークの場所と休憩の場所を分ける（場所の構造化）、③休憩時間の終わりを示すタイマーの使用をポイントにした支援を、1か月半の間、午前中の日中活動で行った。具体的な流れは、次のとおりである。

①Hさんの作業機の左側に5段のラックを置く。ラックのトレイに、上からプットイン課題弁

別課題を入れ、4種類の課題を行ってもらおう。一番下のトレイにはお茶カードを入れておく。

②机の右側には終了箱を設置。トレイの上から順番に課題を行い、終われば終了箱に入れる。「左から右」のワークシステムとした。

③4段めのトレイの課題が終わると、最後のトレイからお茶カードを自分で取り出してもらい、示してもらおう。示された職員は、すぐにその場でお茶を提供する。



Hさんの机

④Hさんは、お茶を飲み終わったら机に貼ってある「居室カード」を持って、居室に休憩に行く。

⑤Hさんは居室に移動したら居室前にある3段ボックスの中のポケットに「居室カード」を入れる。職員は、そこにある休憩グッズのかごのタイマーを押し、Hさんに居室に入ってもらい休憩グッズで時間をすごしてもらおう。

⑥タイマーがなると、休憩時間が終了。Hさんはタイマーを切り、休憩グッズのかごの中にある作業機のカードを持って、作業場に戻る。

⑦作業場に戻ったら、カードは作業機のポケットに入れる。

この①～⑦の流れが1つのセットで、それを数回くり返す。支援は、ワーキングチームのメンバー2名を固定して行った。

机での作業中と居室での休憩中（タイマーの使用結果）の観察記録をつけ毎週のまとめを行い、それとは別に以前より行っていたHさんの毎日の健康状態、問題行動のデータ表を1か月単位で作成した。

3. 経過

当初、Hさんがこれまでとはちがったやり方に不安を感じるのではと予測していたが、自立課題に対しても従順にまじめに取り組まれた。居室での休憩については、途中で居室から出てこられてお茶を探すことが何回もあったものの、タイマーがなって声をかければ作業室に素直に戻ることもできた。ほとんど混乱することなく、2セットの活動を終えることができた。

3日もすると、休憩中に居室から出てくることもなくなった。作業室までの移動も逸脱なく可能になった。その後、10分から始めた休憩時間を15分に延長したり、自立課題の内容を評価しながらHさんが好むようなものに変更したり、バリエーションを増やしたりした。Hさんにとっては苦手なこうした変更も素直に受け入れ、真面目に課題に取り組んでいる。

一方で、作業活動までの時間帯や食事までの待ち時間、昼休み、夕食までの時間帯などの「自由な時間」の過ごし方に課題がある。居室でゆったり過ごしてもらおうことが望ましいが、必要最小限のものしかない現在の居室では、「何をするのか」を示しにくい。また、多くの職員が支援を行う場合は、支援の手順にどうしてもばらつきがでてしまい、Hさんの混乱につながったり、そのストレスが違う問題行動を引き起こす面があった。

4. 支援のデモンストレーション

その後、行動制限をさらに軽減するため、主治医と相談し投薬調整をする一方でHさんの居

室や作業場、自由時間の過ごし場の場、パーテーションの使用など環境設定に工夫し、終わりをタイマーで示すスキルを応用するなどに取り組んだ。しかし、タイマーの理解が他の場面では生かせなかったり、特定の時間帯に問題行動が頻発しエスカレートするなどがあったため、コンサルタントに相談したところ、スケジュールの示し方がHさんに理解しにくくなっているなどの指摘があり、コンサルティングの最後の1回に、実際の支援のデモンストレーションをしていただくことになった。

コンサルタントは、スケジュールカードを持って作業場にきたHさんをトランジションエリアに促し、トランジションエリアに設置してあるポケットにスケジュールカードを入れるように指差した(下左)。作業が終わると、次の行動である「休憩」のカードをHさんにとってもらい、休憩場所に促す。休憩場所にあるタイマーを押し、Hさんはそこでくつろぐ(下中)。タイマーがなると、Hさんに手招きし「なったよ」と声をかけられ、トランジションエリアに促す。スケジュールカードをポケットに入れて「ワーク」カードを取るように示し、作業機のポケットにそのカードを入れてもらい作業を開始する(下右)。作業が終わると再度トランジションエリアに促して、「休憩」カードをとり休憩エリアへ…という流れであった。



このデモンストレーションは、非常にわかりやすくイメージが伝わった。Hさんの日中活動に、部分的にでも取り入れて支援していきたい。

Case 5-2

干渉・促しを嫌い奇声、自傷、粗暴 >>> ワークシステム導入とエリアの分離

Iさん、女性、30歳代。療育手帳A判定、障害区分認定6。重度の知的障がいに伴う自閉症。入所を経て地域のケアホームに移行し、現在は日中活動を利用。

好きなことは入浴(水を触る・見る)や外出(外食・買い物)で、嫌いなことは支援者や他利用者からの干渉や自らの行動に対して促しの声をかけられること。特に生理前や帰宅前などは奇声・自傷(手や膝を噛む・頭部を壁に打ちつける等)・粗暴(ひっかき)に繋がることもある。

ADL面は自立。発語はなく、日々の行動をジェスチャーか直接行動で示す。支援者の簡単な指示や声かけを理解でき、実物や写真などで具体的に提示したり、事前説明を行なうと、より理解しやすくイレギュラーな変更も受け入れられる。体調不良や自分の思いを訴える手段がないため、奇声や自傷で不快感を表出する。

1. 簡易評価

簡易評価の結果、①かなりゆっくりしたペースである、②絵や写真によるマッチングが得意、③接触を好まない、④促しは声かけよりも指し示す方が刺激になりにくい、⑤タイマーの音を認識し場所移動ができる、⑥移動場面の儀式的な行為については問題視しなくてもよい、⑦途中で止められるのを嫌い最後までしたい気持ちがあることなどがわかった。

支援の考え方として、現在できている行動も一旦中止し、Iさんの障がい特性に合わせた支援方法で進めていくことの重要性や作業場面でのワークシステムの導入と環境整備から取り組み、そこでの評価を活かしながら生活場面へと応用していくという助言をコンサルタントからいただいた。

2. ワークシステムの導入

以前から取り組んでいた醤油さしの作業は継続して行い、新たに、Iさんが外出の際に興味を示されるマーク（POLA・メンソレータム・セブンイレブンなど）のマッチング課題を導入した。

課題を作業機の左側の棚に置き、上から順番に行い、終わった課題は右側の終了ボックスに入れるというワークシステムに変更した。興味のある課題を取り入れたことで、新しい活動の流れもスムーズに受け入れてもらえ、上から下へのルーティンや終了ボックスへの手順も10日程で覚え、一人で活動を進められるようになった。現在は、休憩をはさんで2～3回くり返して行っている。

Iさんの行動ペースに合わせて作業量・回数の調整ができるようになり、Iさんへの促しや声かけは不要になった。当初は、課題手順を覚えてもらうために1回の作業量を少量にし、くり返し同じ手順を行ってもらうように配慮した。

3. ワークと休憩エリアの分離

作業室の一部をパーテーションで区切り個別化し、作業エリア（机と椅子・課題棚・終了ボックス）と休憩エリア（テーブル・ソファ）に分けた（下）。

以前は、Iさんの作業機が作業室の奥まったところにあったため、Iさんが作業を始めるまでに、他の利用者や作業室内に置かれた物に順々に触れながら移動しており、自席に到着するまで多くの時間がかかっていた。Iさんの作業スペースを入口から近い位置に設けることで、移動の際の時間短縮が可能になった。また、周囲からの刺激が遮断されたことで支援者への確認行動回数が減り、一人で落ち着いて作業に取り組めるようになった。

Iさんのさまざまな確認行動は手順のわかりにくさからくるのか、単に確認したいというこだわりやパターン行動なのかを見極めた上で、同じ作業場の職員にもIさんの特性を伝え、確認行動に対する対応について理解と協力を得るようにした。

4. タイマーの使用

休憩時間の終了を示すものとして、タイマーを使用してみた。休憩時にIさんがスタートボタンを押



し、タイマー音がなったら作業エリアへ戻る流れとした。タイマーを休憩エリアのテーブルに置いておくと、途中でIさんが勝手に押してしまうことがあったため、タイマーを終了ボックスに入れる流れに変更したが、今度はスタートボタンを何度も押してしまい、支援者がタイマーを確認しなくてはいけない状態が続いている。「タイマーがなると作業席に戻る」ことは理解していると思われるが、5分の休憩時間の過ごし方がわからず、靴を触って遊ぶ・机を持ち上げて下げる・指の皮をめくるなどの行動が見られ、タイマーがなっても移動できない日もある。

5. 経過

Iさんにわかりやすい環境と興味ある課題を設定したことで、一人で活動を進めることができるようになった。今後、自立課題については楽しめる課題を増やし、パターン化される活動にモチベーションを持たせていき、休憩時はIさんがリラックスしながら終わりが明確な具体的な過ごし方を模索していく。

日中活動以外の場面（昼休み）は何もすることがなく、食後に食堂やホールを色々な物に触れながらウロウロされている姿を見かける。食堂は広く区切りのないスペースであり、自由な時間に何をすればよいかわからないための行動だと思うので、日中課題での取り組みを評価して、昼休みもわかりやすい環境と楽しい活動を設定し見通しを持って一人で進められるように取り組みたい。

Iさんの強みでもある「一度覚えたら、パターン化し間違えない」「絵や写真によるマッチングが得意である」ことを十分に生かした支援を、Iさんの自立に向けて今後も継続したい。

ふりかえり・まとめ

簡易評価を行ったことで、利用者の新たな情報が得られ、これまで非常に難しかった職員同士の情報共有や支援への意識統一が図れた。その後の具体的な事例の取り組みの中でも、それらが生かされた。また、「自立課題」を用いて行った新しい支援のプログラムは手直しを加えながら進められ、利用者の自立につながりつつある。「構造化」「環境調整」「スケジュール」「ワークシステム」「自立課題」「タイマー」についても、コンサルタントから実際の指導場面の中でより具体的に伝えてもらい理解できたので、実際の支援に展開しやすくなったと思う。

ワーキングチームのメンバーは、学んだことを他の職員に伝えるために支援方法のレジュメの書き方や記録の書式に工夫を加えたことで、以前に比べ複数の職員で連携して支援しやすくなり、また記録内容が整理、評価しやすくなって、容易に次の計画に進められるようになった。

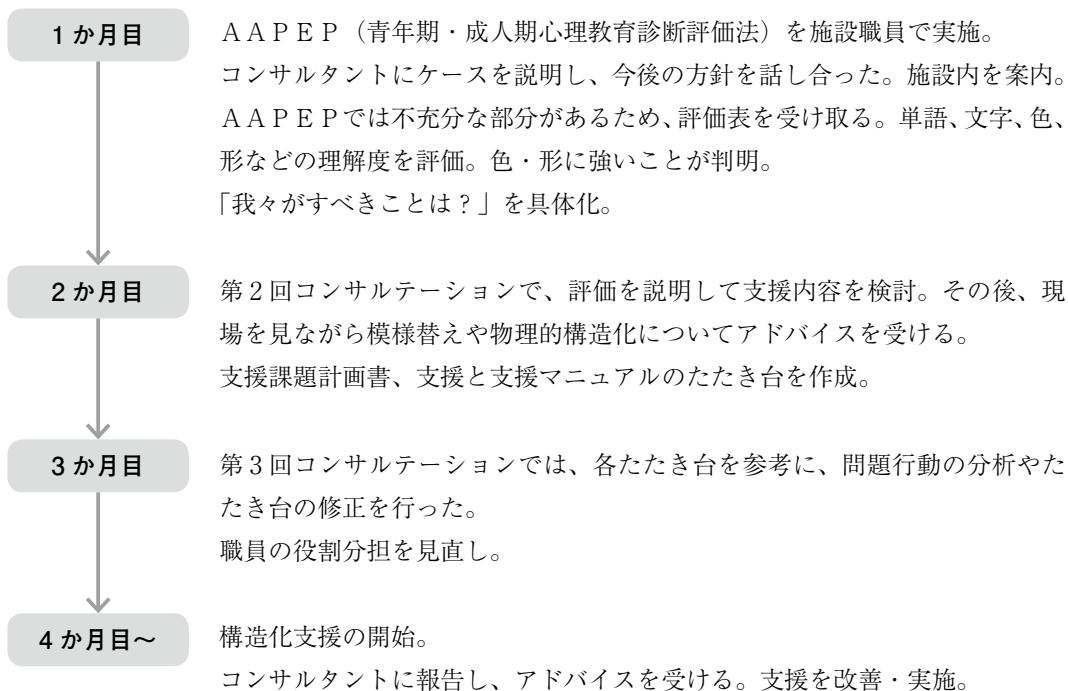
コンサルテーション事業全体を通じて、いくつものセッションの中で私たちは「仮説－検証」のプロセスを実施できる場面を多数与えられ、サポートを受けながらPLAN（仮説と介入計画）→DO（プログラムの実施）→SEE（プログラム実施の評価）をくり返したことが大きなプラスとなった。たとえ利用者の問題行動へのアプローチの成果が出にくくても、また失敗がくり返されて大きな困難性を感じても、利用者のよい部分を見つめてそれを生かした可能性を探ること、複数の職員チームで共通認識をもって対応していくこと、本人の立場に立って尊重していくことに支援のヒントがあると実感できたことは、何よりも貴重な経験だった。

障害者支援施設／生活介護

ねらい・背景

強迫的表情で電球破壊を行う利用者の対応について、施設内だけでは限界を感じたため。

流れ



Case

6-1

こだわりの行動がパターン化 >>> 本人評価し、作業とスペースを構造化

Jさん、男性、20歳代。

入所して1年が経ち、生活棟内のトイレトーパーや紙類をトイレに流してしまうようになる。制止や注意を行っても改善されず、最終的にトイレトーパーは棟内に置けなくなり撤去されてしまう。

撤去後、棟内の電球（蛍光灯や蛍光灯型の電球）を破壊するようになる。危険なため制止を試みるが、本人は強迫的な表情で行っており止められない。日々状況は悪化していった。

1. 課題

1 回目のコンサルティングで、J さんの理解において、わかっているようでわかっていないことが多く、見通しが持てず不安につながっていることが指摘された。支援者も J さんの訴えを誤解している場面がありそうなので、J さんと支援者の意思疎通ツールを作らなければいけない。

ひとりで上手に余暇を過ごせず、その結果、感覚を楽しみ、感覚に翻弄される面があるので、適切に一定の時間を過ごせるようにし、また自分で見通しを持って過ごせるように再構造化するという方針となった。

生活棟での行動はパターン化しており、「トイレで紙を流さなければならない」「電球を破壊しなければならない」といった負のスパイラルに陥っている。この状況の中で環境を変えようとしても、同一性保持の特性により J さんの抵抗にあい、対応は極めて困難と思われるため、第一の切り口を生活場面ではなくそうした行動がない場面に置くことになった。

〈まずすべきこと〉

- ①問題行動や、苦手な状況などのデータ収集に取り組む
- ②見通しの不安があるため、正しい本来のスケジュールを伝える
- ③行った A A P E P では評価が不十分な面があるので、改めて単語、文字、色、形の理解度の詳細を掘り下げた評価を行う

②のスケジュール支援は、日中活動など生活以外の場面で、マンツーマンが可能な体制で期間限定で取り組む方針のため、職員会議で具体化案を検討することとなった。中途半端なデータ収集・仮説で取り組まず、支援は現状維持とする。

〈施設内の構造についてのアドバイス〉

- ・作業スペースで構造化レベルの異なる人が同じ班になっている。別のグループに分けた方がよい。
- ・J さんの居室は周囲に刺激が多すぎる。プライベートルーム（クッション素材で囲まれた防音部屋の個室）は、周囲の刺激をカットできる意味では個室として成立する。
- ・共用スペースは空間としては広過ぎ、そこに最大 30 人が入るのはストレスが大きい。
- ・9 時の朝礼、15 時のおやつ、昼浴など集団の行事が多く、自閉症の人が多い状況と合っていないのではないか。今後、ユニットケアなど生活場面の構造化、個別化を目指した体制を考えるべきでは。

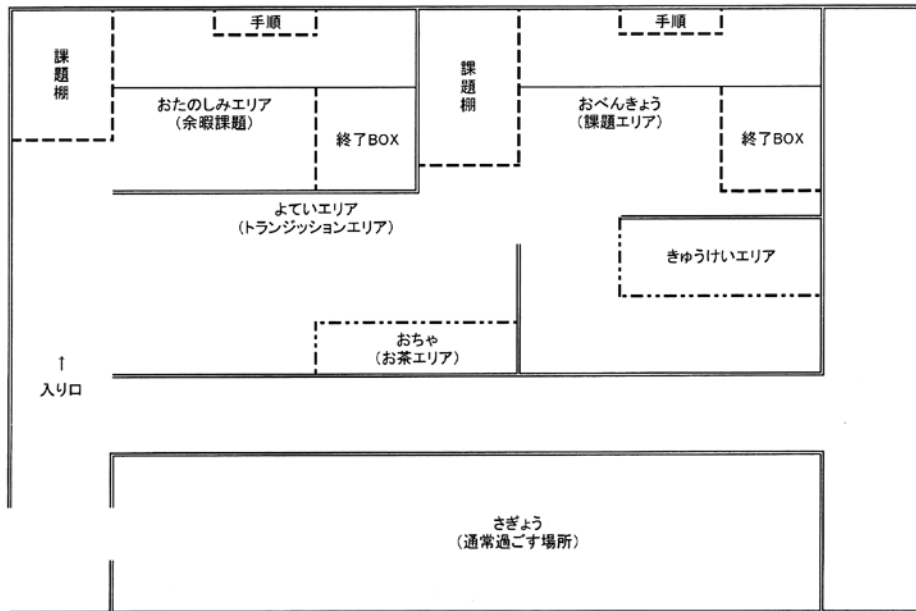
2. J さんの評価

〈J さんの特徴〉

- ・集中力は 20 ～ 30 分。→その時間内での自立したスケジュールとする。
- ・自信がない時に、左側のカードから取る傾向がある。→左から右の順も考えられるが、上から下のほうが確実か。
- ・写真についての理解度が評価できていないので、生活場面の中で再評価する。絵カードだと、経験の少ない場面で不安になる可能性がある。写真や現物のほうがより確実である。ただし、写真には知らせたいもの以外の情報は極力載せない。

3. 物理的構造化

1 作業に対し 1 エリアが対応するようにした。



当初設置後、見直しを経たレイアウト

- ① トランジションエリア（スケジュール提示の場所。動線に配慮し、他の作業の中間的な位置に置く）
- ② 「おしごと」エリア（ナットはめなどの作業。ワーク班内のエリアの一角を利用）
- ③ 「おべんきょう」エリア（評価で得意と見られた型はめ、色分け、パズルなどのワークシステム）
- ④ 「きゅうけい」エリア（ソファとひもを用意。くつろげる場所）
- ⑤ 「お茶」エリア（一連のスケジュール終了の場所）

4. 構造化エリアでの支援の実施

初日は、手が止まったり間違ったりすることも多く、介入度も高くなる。時間配分も 30 分を超え、作業片づけのチャイムになってしまう。J さんの集中力も切れてきたため、予定の課題を減らし短時間で終了。

2 日目は訪問コンサルテーション日だったため、エリアの手直しと課題の修正のアドバイスを得る。大まかな動線理解はできるようになり、時間も 30 分ちょうどであった。J さんの視野が非常に狭いことが判明し、視野に配慮した修正を行った。午後にお母さんが来所。構造化エリアやワーク班を見学してもらい、支援員が説明を行う。

ワーク班に異動したことによる混乱は見られず、J さんも受け入れている様子。生活棟においても、この時点での影響は認められない。生活棟での支援変更により、パターン化していた時間帯の電球破壊は減少したが、変更して数日は、変更での混乱からか破壊行為や電球を気にする場面があった。

5. その後

課題の道具をまとめて取ることが多い。しかし、ひとつずつ区切りがあるものはひとつずつ取るので、区切りを設けてみた。

課題の順序について、カードではなく現物に目がいき現物優先で動かそうとする。指さしたものは現物を一瞬隠す介入を行うことで、カードの手順に従う。ひとつずつ区切りを設けた課題はひとつずつ取ることもあるが、職員が離れると課題によってはまとめて持っていることがある。持っていたい印象なので、効率が落ちないものについては注意せず静観する。

「きゅうけい」はスーパーボールで定着し、5分間落ちていて過ごせている。

6. 再構造化

スケジュールの流れを変更して、パターン化してしまうのを防ぐ。スケジュールの変化に対してどのくらいの日数で新しい動きに切り替わるかを見るため、新たなスケジュールで毎日同じように過ごしてもらう。3日ほどで変化に対応してスケジュールがルーティン化し始め、次のスケジュールを予測したような動きが見られるようになる。スケジュール本来の目的である「変化を教える」ためには、3日を1区切りにしてスケジュールの流れを変化させることが望ましい。

課題の棚は、引き出し式に変更し、現物に目がいきにくくした。その後さらに、棚の位置をJさんが座る位置の後ろに変更した。それでも徐々に現物を優先したい動きが見られるようになり、足を出して前を向いて作業をしなくなったりしたため、棚の位置は前方左側に戻し、棚に布をかぶせることで、手順カードに目がいきやすくした。カードに従うことが増えたが、まだ現物を優先させてしまうことが見られる。

ワーク班では穏やかにしていることが多く、作業も安定してこなせている。生活棟でも安定してきたが、1泊帰省の帰所後に電球破壊や気にする傾向がある。

ふりかえり・まとめ

Jさんの理解の仕方などの細かい評価と課題設定への細かい配慮が足りない部分があったが、大切なことは、すぐに修正することと、早く気づき先手を打つことである。対応できる支援者の数も徐々に増やしたいので、統一した支援を行うためにマニュアルの作成や評価に応じた頻繁な修正、職員間での情報交換、連携を密に行っていくことが、今後より大切になってくる。

また、生活棟への般化を実施する展望があるので、生活棟についてもデイルームなどの共用スペースが自閉的特性のある人にとって意味のある空間となるよう再構造化していく議論を始めた。

Jさんに関しては、取り組みを継続・拡大し、生活棟のほうでもつなげていけるように支援していく。コンサルタントからは、Jさんの好きなキャラクターを用いて、踏み台昇降などの運動プログラムを検討するのも有効な手段であると助言を得た。

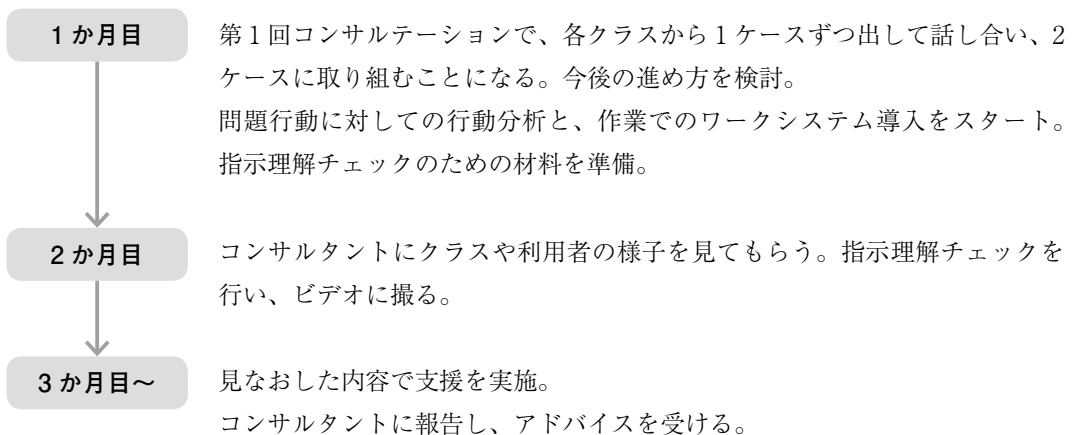
今回のコンサルテーションで積んだ経験値をJさん以外のケースにも反映できるように意識して、よりよいサービスの提供を実現していきたい。

生活介護

ねらい・背景

強度行動障がい者の人を受け入れることができるような施設を目指し、利用者が一人でできることを増やして達成感を得たり日々の生活がしやすくなるよう、問題行動を改善していくために外部からの専門的アドバイスを受け、職員の資質を高めることを目的に行った。

流れ

Case
7-1

トイレから出ない >>> タイマーを活用、生活全体へもアプローチ

Kさん、男性、20歳代。知的障がいを伴う自閉症。

手先は器用で、力加減を考えて作業できる。細かい作業も得意。理解力も高い。

トイレにこだわりがあり、排尿が終わってもトイレからなかなか出てこない。園では、排尿が終わっているのにズボンを下ろしたまま動こうとしない。無理やり出すと怒って泣き叫ぶことが多い傾向がある。トイレは、職員が時間を決めて誘導を行っている。施設では砂時計（3分計）を使用し、初めは自分で出てくることがあったが、次第に砂時計をひっくり返してトイレから出てこなくなった。その後、タイマーの使用（1分）を開始した。

家庭ではトイレに行ったり来たりをくり返し、ひどい時では声をかけても2時間以上出てこないこともある。怒られるまで入っており、昼間は大きな声で怒れるが、夜は近所迷惑になり怒れないので困っているとのこと。

アンパンマンやドラえもんが好きで、よく絵を眺めている。

音に敏感で、苦手な音楽（特に女性の高い声）に対し、耳をふさぐ。母親によると、話しかけてほしくないときにも耳をふさぐことがある。気分や体調にもよるが、周りのざわつきなどでも、しんどくなり泣き叫ぶことがある。

嫌なことがあったときには、近くにいる誰かを爪を立ててつねる。

1. ねらい

今回のコンサルテーションでは、トイレのこだわりの改善に取り組むこととなる。ただし、問題行動にアプローチしすぎると、かえってこだわりを強化してしまうことがあるので、生活全体の整理をして環境を整えていくようにする。また、トイレにこだわっていない時間に着目をして、そのような時間を増やしていく。

そこで、2つの視点からアプローチすることになった。

①生活全体へのアプローチ

- 一連の流れを一人でやりきる経験を積む。
- 一人で判断してやりきる経験を重ねることで、確実にできることを増やしていく。
- 場面のきりかえが苦手なので、作業の場面において自分で判断をする機会を増やす。



具体的な方法として、作業は確実に自分でやりきれるようにワークシステムを用いる。
(終わり方を統一し、すっきり終われるものを作業にとり入れる。新しい課題はモチベーションをあげ、最初と最後に難しいものや新しいものを入れない)

②問題行動へのアプローチ

- Kさんが納得してトイレから出られるようにする。



基本的にはこれまでと同様、タイマーの使用を続ける。職員がそれぞれのやり方でアプローチしていたので、統一した方法で行い、その都度様子を記録していく。声かけは、介助率が低いが理解度が高いので、その分人への依存度が高くなることをふまえて、次第にアプローチを弱くしていく方向で行う。

2. ワークシステム（生活全体へのアプローチ）

作業物品の実際の写真を用いて作業の順番を示し、終わったら「おしまい箱」にカードを入れる方式をとった。マッチングができるので、作業物品は自分で取りに行き、写真と照らし合わせて持ってくるようにした。

すると、自分の机から作業物品をとりに行く距離があるためか作業物品の前で立ち止まっていることが多く、また作業物品を写真と照らし合わせるにしても、作業物品が積み重ねられており情報量が多いので、探すのに時間がかかることもあった。

そこで、Kさんによりわかりやすく、かつきりかえの時間も空かないように、物品をとりに

行く方式から3段ボックスを机の上に置く方式に代えた。3段ボックスの各引き出しに色カードを貼り、その順番を示すついたてを設置し、作業が終わったらその色カードをおしまい箱に入れるものである（右）。

初めは上から順にしていたものの、次第に真ん中のカードからやり始めるようになった。「3段ボックスかついたての方が、どちらを順番の手がかりにしたらいいのかが明確でないのでは？」という指摘のもと、数字の概念がどこまであるのかを評価することとなった。すると、Kさんは数字を形で覚えており、数列の概念も理解していることがわかった。そこで、作業の順番通りについたてに上から数字をつけた。



それから、今までは作業を終えたらおしまい箱に入れるようにしていたが、作業を始める時に手続きを行うようにした。また、カードはおしまい箱ではなく、3段ボックスのポケットに入れるように変更した。これによって、終えた作業物品を3段ボックスの引き出しに戻し、次の作業を取るという「きりかえ」の場面がスムーズに行えるようになった。

手続きをしっかりと行うことが重要で、違ったやり方をしていたらすぐに正すことが大切であるということがわかった。

ついたての作業のメニューの4番目に、Kさんの好きなドラえもんの塗り絵のカードを入れ、ご褒美的要素を取り入れた。Kさんも作業が終わったらできるというシステムを理解できている。

3. 作業内容の見直し

従来、作業時間の30分が経過すると、作業が途中で終了させることが多かった。Kさんは、すんなりとやめることもあったが、怒った表情でつねることが多くあり、今振り返ればこちらの都合だったと反省した。そこで、作業内容は30分の作業時間でこなせる内容を選んだ。

また、作業は完了しているのに、それをしばらく眺めたり、手で持ち上げたりをくり返している状況があり、自分から次の行動に移すことが難しい状況があった。例えば、5色のカラークリップの色分けで全部分けているにもかかわらず、容器を片手で何度も持ち上げて感触を楽しんでいたり、ボールペンの組み立てでは組み立てたボールペンを持ち上げなかなか完成の箱に入れず、職員の声かけや指さしによりやっと次の行動に移ることが多かった。

そこで、クリップとボールペンの容器にふたをつけ、そのふたに穴を開けて、穴の中に落とすことで終わるという形式にすると、その動きはなくなり、次の行動に移りやすくなった。穴に落として完成品を見えなくするという少しの工夫で、終わりが明確になり次の行動に移れるようになることを知った。

4. トイレのこだわりに対する取り組み（問題行動へのアプローチ）

まず、行動の記録をとることから始めた。トイレ誘導をした前後の様子や職員のアプローチについて、特に目立った様子などを記録した。家庭でも、帰宅後から翌朝の様子を連絡帳に記入してもらうようにした。

次に、職員のアプローチを変化させた。トイレ誘導の時間になると部屋からタイマーを持っていくように声かけを行い、一緒にトイレに行きKさんがタイマーのスタートボタンを押す。タイマーはあらかじめ1分にセットしてあり、タイマーが鳴るとKさんが止めるのを30秒待つ。30秒待ってもKさんが止めようとしなかったら、職員がアプローチする。アプローチは、声かけ、肩をトントンとたたき、タイマーに指さし、咳払い、OKと書かれたカードをKさんの前にたてるということを行った。

納得ができず泣き叫んでトイレから出てくることもあったが、徐々にタイマーがなくなってから30秒以内に自らタイマーを止めることができるようになった。何らかの職員のアプローチが必要ながらもできていたが、次第に回数も減ったため、方法を変える。

トイレの後の活動や場所をカードで示し、部分的にワークシステムを取り入れることにした。まずトイレカードをKさんに渡し、トイレに行く。トイレカードは中に設置してあるポケットにいれ、そこに入っているタイマーを取り出し、スタートを押す。タイマーがなり、自分で止めるとタイマーを直し、次の活動を示すカードを取り、トイレを出るというものである。初めは職員が横についていたが、次第に距離を空けるようにし、トイレの外からの声かけでKさんがタイマーを止めて出てこられるようになった。

途中から、ドラえものの塗り絵を余暇として取り入れると、Kさんは熱中してするようになった。家庭に持ち帰ってしてもらったところ、塗り絵がしたいがためにトイレからすぐに戻ってくるという報告を受けた。施設でも、テレビの続きが見たいがために急いで戻ってきたことがあったため、塗り絵の途中でトイレに行けばトイレから出てくる動機になるのではと思いつき何度か試したが、空いた時間のたびに塗り絵をしていたので特別感がなかったのか、あまり効果はないように感じた。

5. 塗り絵について

ご褒美的要素で取り入れたドラえものの塗り絵だが、Kさんの塗り方は線にそって塗るのではなく、大きくはみ出す形でやけくそのように勢よく塗ることが多かった。余暇なので好きなように塗ってもらっていたが、コンサルタントから「塗り絵の意味がないのでは」という指摘を受け、線を意識してもらおう支援について考えた。

色鉛筆で色塗りをするクラス活動があるので、その時にまず単純な図形の線に沿って指定された色でなぞってもらい、その後に中を塗ってもらうようにした。その作業をくり返すことで線を意識し、次第に大きくはみ出すこともなくなり、ゆっくりと色鉛筆を動かして塗るようになった。

余暇でのドラえものの塗り絵に関しては、絵が少し複雑なので、職員があらかじめ塗る範囲を色で囲っている。少しずつではあるが、できるようになってきている。

6. コンサルテーション終了後の状況と今後の課題

3段ボックスを使用したことで、これだけこなしたら終わりという見通しができ、Kさんにとってわかりやすくなった。その日の体調やテンションによって作業のスピードにムラがあったが、現在は以前のようなムラもなく、ついたてを見せると自然に取り組むことができ、作業に集中して行う時間が増えている。また、以前は作業中に職員の声かけを求めたり、イライラ

して職員をつねることが多くあったが、その行為は軽減された。Kさんにとってわかりやすくなったからであると考え。部屋では周りの音に敏感になって耳をふさぎながら作業を行うことが多かったため、現在は更衣室で作業し、周りの音に影響されずに行っている。

今後の課題は、継続して作業の場面の整備を行い、作業物品の幅を増やすことである。作業は今ある程度固定化されてきているので、バリエーションを増やす必要がある。今回数字の概念の評価でわかったことを生かせる作業も取り入れていけるようにしたい。

トイレに関しては、トイレの後の活動や場所を示すことが、Kさんのトイレから出る動機付けにつながっているのではないかと考える。現在、外からの働きかけで出てくれるようになっているものの、その働きかけを待つという傾向が高い。職員の声かけをズボンを下げたまま待っていて、声をかけると出てくるという状況にあり、人的依存度が高い傾向にある。

家庭でのトイレこもりは、コンサルテーション事業が始まってしばらくして、帰宅後は少なくなり早朝に多く長くなった。その後、次第に減っていき、現在はほとんどなく、声をかけなくても5分程度で自分からトイレから戻るようになっている。

次のステップとして、施設で人的依存度が低くなるようにすることが課題で、最終的にはKさんが自分の意思で納得して出てくる状態につなげていきたい。

Case

7-2

集団が苦手、他害行為 >>> 指示理解チェックと生活者記録から支援を見直し

Lさん、男性、20歳代。重度の知的障がい。

意思交換は苦手なため、発語による意思表示はなく、不快な思いや、不安な様子を示す場合は、「アー、アー」などと声をあげることがある。トイレに行きたい場合はズボンの前をトントンと叩き意思表示することもあるが、毎回ではない。喜んでいる時は、自分や相手の頬に手で触れながら、笑顔で表現することも多い。話し言葉もある程度は理解がある様子で、「トイレに行く」「ホールへ行く」「ゴミを捨てる」などは言葉かけで通じている。

集団の中やホールなどが苦手なため、調子がよくない時などは他の利用者や職員に爪をたて、つかみにかかってくる。しかし、ホールでもラジオ体操の音楽は好きな様子で、参加することができる。苦手な音楽、音質があるようで、それがかかっている時は、声をあげ、他害行為に及ぶことがある。

給食は白いものが苦手なため、ご飯や牛乳、ヨーグルトなどを見ると、咳き込みながら吐きそうになることがある。エレベーターや事務所、非常階段、屋上などの場所は好んで移動し、笑顔も多く、特に非常階段は自ら進んで登っていくほどである。

手先は器用で、はさみを使った紙切り作業、ペットボトルのラベルをはがし、職員と一対一の中では数種類のプットイン作業（デコレーションボール入れ、カラー棒の棒さし作業など）に取り組むことができる。他の利用者が作業に取り組んでいる時間は、休憩などをしながら寝ていることが多い。

1. 目標と課題

- ①他害行為（爪をたてて、つかむ）で、他の利用者とのトラブルが多いので、Lさんが落ち着いて過ごし、その行為を少しでも軽減していけるよう支援していく。
- ②Lさんの将来のためにも、少しずつでも集団の中で生活できるようになってほしい。

2. 評価の必要性

コンサルタントから最初にアドバイスを受けたのが、Lさんの評価についてである。わかっているようでいて、本人に対する理解、アセスメントは支援の中で曖昧に進めてしまっていることが多い。本人がどこまで話し言葉、文字、色などを理解しているのか、作業に対する集中力、どのような作業が本人に合っているのかなどの一定の評価をする必要があるとのこと。そのために、指示理解チェックシートと判断するための材料を用意することになった。

また、どのような状況や周期で他害行為が多くなっているかなどを、Lさんの生活全体で捉えることが必要ということで、睡眠、他害、薬の服用などの記録を施設だけでなくショートステイ先や家庭での様子を含めてとるため、生活者記録用紙を用意した。

〈指示理解チェックについてのアドバイス〉

- ・型にはめすぎてガチガチに行うものでもなく、あくまで一定の評価である。
- ・Lさんの場合は色分けや細かい作業は難しいため、ボールなど持ちやすく大きいもの10個程度を1セットとしたプットイン作業がよい。
- ・長時間座って作業に取り組むことは難しいので、数セットごとに休憩を入れて、作業→休憩→作業をくり返す。
- ・作業の目的は集中力を養うこともあるが、できないことを指摘されることの多いLさんにとって、ひとつのことをやり遂げる達成感、自信を持ってもらうことにもある。
- ・作業をする場合も、いきなり他の利用者と一緒というのは難しい。職員体制が許せば、Lさんだけが作業をする時間を設けて取り組むことが望ましい。
- ・視覚的情報をよく取り入れているため、人が入ってくると集中力も乱れ、不安定になることが多い。休憩スペースはパーティションで区切り、視覚刺激を避けるとよい。
- ・休憩スペースには、Lさんがリラックスし、その部屋で過ごせるようなグッズも何か用意した方がよい。

〈生活者記録より〉

- ・夕食後（18時頃）、薬を服用。毎日19～20時頃に就寝しているが、寝ない場合は病院の先生の指示のもと、薬を2錠追加服用している。
- ・朝は8時頃に起床し、朝食をとっているが、量は少ないことが多く、食べていないこともある。そのような時は施設でも調子が悪い時が多く、特に給食前は他害行為が増えている。
- ・他害行為は、朝の登園から朝礼までの時間、給食前の時間、帰宅前の時間が多い。
- ・あくまでも傾向性だが、ショートステイ先から登園する時の方が調子がよく、落ち着いていることが多い。

3. 取り組み内容

以上のような状況やアドバイスを踏まえ、クラス内に①Lさんのスペース（パーティション



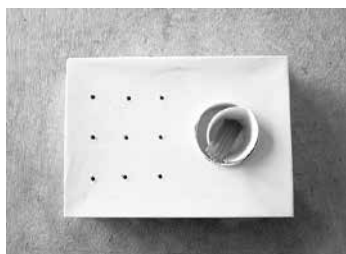
作業スペース



休憩スペース



休憩スペース



作業物品



作業物品

で区切り、視覚刺激を避けたもの)をつくり、②作業道具を数種類作成した。

クラスの一般的なカリキュラムでは午後からホールで音楽ということが多いので、その時間を利用し、職員と一対一でのLさんの作業時間を設けた。他の利用者がいると落ち着かないことが多いが、一人ならば作業に取り組むことができ、1～2週間経つ頃には、作業道具を見たと自ら取り組み始めた。しかし、日によって差はあり、作業→休憩→作業を数回くり返して寝てしまうこともあれば、20～30分その工程をくり返せる時もある。作業は、Lさんが調子の悪い時でもできるような確実な形にすることが大切とのアドバイスもいただいたが、現在は全くできない日はほとんどなく、職員が用意しなくても、自ら作業道具を取り出してやることもあるくらい、Lさんにとっても自分の一日の流れに組み込まれているようである。

Lさんには基本的に職員がマンツーマンで付き他害行為を防いでいるが、以前に比べると他害行為が減っているというよりも、調子のよい日が少し増えてきたように思われる。また、Lさんがどういった状況や時間に他害行為に及びそうになるか職員も把握できるようになり、その時はより注意し、支援を行えるようになってきた点も大きいと感じる。しかし、クラスに設けたLさんのスペースで寝る以外に過ごすことができず、調子の悪い時は、そのスペースから出ようとし、他の利用者をつかもうとする。

ホールでのカリキュラム参加は基本的に難しいが、Lさんの調子がよければ、「ホール体育」のラジオ体操や種目への参加、ミュージック・セラピーへの参加など、回数は増えてきている。

4. 今後の課題

Lさんの中で作業が一日の流れとして組み込まれてきたこと、Lさんに対するアセスメントが職員の中でも深まってきたことなどは一定の評価かもしれないが、まだまだ職員がマンツーマンで付くことで他害行為を防いでいる部分が多く、Lさんの不安を探っていくことも難しい。

今後は、Lさんに対するアセスメントをより深めていくとともに、今のLさんのスペースを

安心して過ごせるスペースとして定着させていくこと、他の利用者がいる所で少しでも作業ができるようになることなどが課題であると思われる。

今後に向けて（第5回コンサルテーションでのアドバイス）

- カリキュラムが日によって異なるのは、変化に弱い人にとってはしんどいかもしれない。いろいろな経験が好きな人もいるが、大枠が一定の方がよいと思う。
- 場所と活動は、できるだけ固定する方が落ち着く。難しい場合は、使う時だけその取り組みに使用するものを出すなどして、見て違いがわかるように工夫する。
- 部屋を分けることは難しいが、家具で仕切ったり、テーブルで区切るだけでも、わかりやすい空間を造ることができる。
- 言葉かけによる支援は、その言葉に頼ってしまい、職員が変わると混乱しやすい。利用者自身が見て予定がわかり行動できることが増えれば、環境が変わっても、その提示されたスケジュールを頼って安定した生活を送ることができるようになる。ハード面を整えたり人員を増やすことに頼るのではなく、利用者自身が自分で行動できることを増やせば、利用者にとっても達成感や満足感が得られ、生活が安定する。
- 自閉症の人の行動をきっちりと観察し、その行動には原因があることを職員が理解する気持ちが何よりも大切である。家族に情報をきかないとわからないこともたくさんある。
- 年度はじめに、各クラスで取り組むケースの優先順位を決めて取り組むと、施設全体が少しずつ落ち着いていく。
- 従来の体制などを変えることは大変困難を伴うが、産みの苦しみが大きいほど、得られるものも大きい。まずはできることからでも取り組んでほしい。

ふりかえり・まとめ

2ケースのみの取り組みであり、またコンサルテーションを受けた内容の報告が随時できず、全体としての情報共有がなく施設全体の取り組みにつながらなかった。

しかし、2ケースのクラスにおいては、新人職員の2人ががんばってくれたこともあり、新人職員を支えてみんなで取り組もうという姿勢がみられたことはよかった。

コンサルテーションを受けるにあたり、4日間の研修を新人職員のみで受けた。新人職員にとっては、研修で受けたことを踏まえて現場で取り組む経験ができてよかったが、職場全体に還元することを思うと、中堅職員のアドバイスをもらいながら進めたかったという感想があった。

施設全体で支援の方法を学ぶことは大切であり、研修や見学を行っていききたい。また、他の職員にアドバイスができるような職員を施設内で育成する。

多機能型

ねらい・背景

自閉症に対する基本的なコミュニケーションの方法や手段、アセスメントの方法など、利用者に合わせた取り組みを行いたいと思い、申し込んだ。

流れ

1 か月目

今回取り組むケースの利用者についての情報を整理する。行動記録と、自立課題を使った評価。



2～7 か月目

ワークシステムを活用した支援を実施。

Case
8-1

支援員の制止に暴力 >>> 行動記録と理解度チェック後、ワークシステムを使用

Mさん、男性、10代後半。療育手帳A判定。自閉症。

特別支援学校卒業後、入所。入所後夏頃まで作業室に入らず、食堂や園庭、廊下で過ごす。

直接行動が主。男性が好きで、園内・園外問わず男性に抱きついたり、触りに行く。食堂では昼食前に並べられた料理を食べる等の行動が見られる。

支援員からの制止の声かけがあると、つねる・噛む・蹴る・頭突き等の行動が頻繁に見られる。作業室横の相談室で1日を過ごす、作業には取り組んでいない。

1. Mさんの評価

4月からの行動記録をとる。つねる・噛む・蹴る・頭突き等の行動が見られた時間・状況を記録。また、自立課題を使い、声かけ・文字・カード・絵・具体物の使用などMさんがどれだけ理解できているかを把握した。

コンサルテーションを受けるまでは、言葉で伝えたり、文字で伝えたり、絵を提示したりと支援員によってMさんへの伝え方も違っていった。さらに、Mさんの理解の把握や行動記録をとることも行っていなかったため、何が伝わって何が伝わっていないのか、言葉・文字・絵など、どの伝え方がMさんに合っているかの把握もできていなかった。つねる・噛む・蹴る・頭突きなどの行動がこういった場面・状況で見られるのかの検討もつけにくい状態だった。

評価を行ったことにより、文字の理解が低いこと、簡単な言葉かけなら理解があり、さらに絵や具体物の方が伝わりやすいことなどがわかった。

2. ワークシステム

ワークシステムを使用するまでは、組み立て系の作業のみの提示を行っていたが、作業部材（具体物）を見せても拒否をして取り組みにくい様子が見られた。コンサルテーションを受けて、作業室の中で新たに作業スペースを作り、作業机・棚（6段）・フィニッシュボックスを用意し取り組みを行うこととなった。評価のための自立課題を含め、組み立て・マッチング・プットインなど約10種類の自立課題を作成し、1回につき計6個の自立課題や作業を準備して取り組んでもらう。

「左から右」という一定のルールのもとで、始まりと終わりが明確になり、見通しがもちやすくなったからか、作業の提示を行っても拒否はなく取り組み始める。最初は20分～30分だったのが、約1時間作業スペースで集中して作業に取り組めるようになった。ただ、集中時間はその日の体調や様子にもよるようで、集中しにくいときは取り組む課題の内容をMさんが好むものにするなどの配慮は必要。

3. 行動マネジメント

拠点を作業室と相談室に決める。作業を作業室で行い、作業を終えると相談室で休憩。

1日の大半を相談室で過ごすことが多かったが、ワークシステムを使用したことにより、作業は作業室の作業スペースで取り組み、休憩は相談室で行うという流れが定着する。作業の提示は、評価を行ったところ具体物が一番わかりやすいようで、具体物で行っている。

休憩時間についてはタイマーの使用も試みたが、Mさんがタイマー音を嫌がったため、支援員側で時間を測り、休憩時間が終わると具体物を見せて作業を行うという形で対応している。

4. 今後の課題

①休憩場所

来月から、今まで休憩場所に使っていた相談室が作業室になるので、休憩場所として使用できなくなる。新たな休憩場所の確保が必要。

②余暇活動

現在の休憩時間は寝るか常同行動が主である。新たな休憩場所を決めた後、どうやって過ごすかが課題となる。実際の休憩時間以外でも、給食前・降園前などのすきま時間（何もすることがない時間）に支援員をわざと蹴って注意されるのを楽しむような関わりが見られていることもあり、休憩時間・すきま時間の過ごし方を考える必要がある。

今後、Mさんが興味を持って取り組み活動を模索する。現時点で興味を持っている活動は、音楽を聴くこと、感覚・感触遊びなど。

Nさん、男性、20歳代。療育手帳A判定。自閉症。特別支援学校卒業後、入所。

日常のあらゆる行動において、行動を促すための確認行為がある（給食場面では、食べ始める時・一皿食べ終える時・次の皿を食べ始める時・食べ終える時・下膳する時など）。

1. Nさんの評価

言葉での提示・文字提示・絵や具体物の提示の理解を確認する。

日常場面ではある程度の言葉の理解がある。指さし・簡単な言葉かけが一番わかりやすい様子。

2. 給食場面

フィニッシュボックスを置き、左から右の流れを作る。コップは2つ使用。

日常場面において、特に給食場面での確認行動が目立っていたため、給食場面に焦点を当てて取り組みを行う。

給食の際は、一皿一皿食べ終える際と食べ始める際に確認があった。ご飯はおかわりの量を事前に1回までと伝えても、何回も確認がある（お茶のおかわりも同様）。

そのため、お茶碗は普通の大きさからどんぶりに変えておかわりはなしとし、お茶を飲むコップは2つ使用した。おぼんを2枚準備し、1枚は食べ終えたものを置くフィニッシュボックスとして使用した。食べ終えた食器は右に置いたおぼん（フィニッシュボックス）へと流すことにする。さらに、給食場面での席を固定する（壁向き）。

最初は支援員が前に座り、流れを確認する。慣れたところに支援員が離れるが、支援員が離れると一皿食べ終えるごとにフィニッシュボックスに置くための確認が出るようになる。ただ、フィニッシュボックスに置くと確認なしで次のお皿にうつることができている。

現在は再び支援員が前に座っているが、今後の取り組みは要検討。

3. 今後の課題

人が刺激になっている。長年の経験で、確認をするべきものと思っているのかもしれない。

また、支援員側もNさんの確認行動に焦点を当てすぎている可能性がある。まずは1人で自信を持って行動する経験をするため、ワークシステムを使用する。自分で始めて自分で終われるという取り組みに焦点をあてていく。そして作業場面でのワークシステムからその他の行動に般化させていく必要がある。

障害児入所

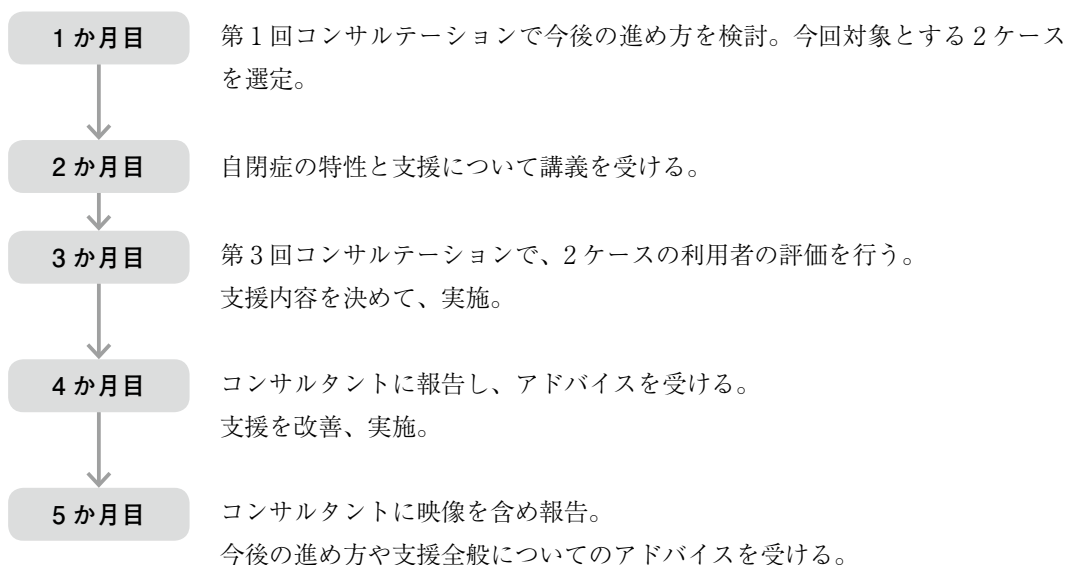
ねらい・背景

施設での「不適切な支援」について報道発表を受けたこともあって、利用者に対する日々の「援助のあり方」について混迷と混乱の岐路に立たされていた。

従来から施設の中では、職員の個人的かつ私的な人生観や経験則に依った「指導」論が主流だった。したがって、エンパワメント論の見地に立った「自立支援」論には程遠い感もあり、どうしても今日の「ケアマネジメント」が根付くのかという課題に直面していた。

このような背景があって、抜本的なパラダイム転換を図るために、まずはエンパワメント支援技術の実際を見て学ぶというスタンスが必要ではないかと考え、導入した経過がある。

流れ



Case

9-1

本人評価を経た「洗濯物干し」の実践

〇さん、男性、20歳代。

「おかわり」「洗濯」「ごはん」等の単語で表現し、聞きなおすと「ください」「する」と付け加える。トイレ、着替え、食事はできる。お金の概念はないと思われる。

他の利用者の服を勝手に着たり、食事を取ったりする。他の利用者を着替えさせようと

することもある。また、服のタグや名札を引きちぎったり、ファスナーの金具を取ってしまったりする。公共の場では、大きな声を出したり、飛び跳ねたりすることがある。興味をひくものがあると、ひとりでそちらへ行ってしまう。

注意すると「わかった」と言うが、すぐにくり返すことがある。要求が通らないと泣くような声を出したり、手を噛んだりする。

1. Oさんの評価

第3回のコンサルテーションで、Oさんの評価を行った。

- ①歯ブラシ・ハサミ・スプーン・ヘアブラシ・靴下・鉛筆を個々に提示して、名称を聞く。
- ②それらの絵カードを机上に並べ、そのカードの上に実物を並べられるかを見る。
- ③それらの実物は、どのように使用するものかを尋ねる。
- ④物の名称を文字で書いたカードを提示して、読んでもらう。
- ⑤そのカードの上に、実物を置いてもらう。
- ⑥数字を書いたカードを提示。数字を小さい順に言ってもらい、カードをその順に並べてもらう。カードを見てもらって数字を言ってもらう。
- ⑦絵カード（食べているところ、走る、寝る、飲む）を提示し、何をしているところか尋ねる。
- ⑧ばらしたボールペンを組み立ててもらう（芯を入れてねじる、キャップをはめる）。わざとキャップを少なくしておき、どうするのかを見る。
- ⑨時計（アナログ）を提示。指す時間が何の時間か答えてもらうことで、理解できたかどうか確認する。
- ⑩Oさんの目の前に4種類のおやつの写真置き、その奥に現物を置き、欲しいものの写真を選んでもらう。

その結果、Oさんについて次のようなことがわかった。

- ①返事は「オウム返し」と考えられる。返事の1つとしての「はい」であり、内容を理解しての返事ではないことが多い。
- ②丸・三角・四角の型はめはできる。
- ③色が何色であるか答えることはできない。
- ④色カードによる同じ色のマッチングはできている。
- ⑤絵カードと現物のマッチングはできている。
- ⑥「どうやって使う？」の表現を理解してもらうのはできない。
- ⑦言葉での指示より、現物・手本を見せての指示の方がわかりやすい。
- ⑧見て流れがわかる作業（ボールペン組み立て）は、Oさんにはわかりやすい。
- ⑨ひらがな、文字と物（歯ブラシの文字の上に歯ブラシを置く）、数字（順番には言えるが、どの数字が1か2なのかはわかっていない。順番どおり並べるのもできない）、時計の理解は、できていない。
- ⑩絵カード（食べる、走る、買い物など）を見て、何をしているところか答えられる。

⑪自分の言いたいことを言うのが難しい →それを表現する方法として何があるのか。

⑫Oさんの中である程度やることの見通しが立てば、指示を待つ場面が多い。

→自分で判断して行動することが目的となる。

⑬具体的な指示には写真、抽象的な指示には絵カードを用いるのもよいだろう。

⑭言語指示は、ほとんど理解できていない。オウム返しの時は、ほとんどがそうである可能性がある。言語指示は、用いるとしても単語や2語文まで。

2. 取り組み内容

Oさんの活動を「洗濯物干し（ズボン）」として実践した。洗濯したズボンが屋上に上がってきたら全部干してもらう作業。

初日は、担当が声をかけて屋上に一緒に行き、干し方を伝えて干してもらった。竿の幅にあうようにズボンを伸ばして干せていた。そのまま、洗濯物が全部上がってくるまで、屋上で待ってもらう。ズボンを干す場所がいっぱいになると、その日の作業は終了。

〈第4回コンサルテーションでの報告〉

①ズボンを干すことはできるが、作業の始まりと終わりを提示しにくい。

②次に干す洗濯物が屋上まで来るのを待てることもあるが、なかなか上がってこないと他の場所へ行こうとしてしまう。

③洗濯物を干す区画を決めて、その区画全部に洗濯物を干しても、カゴの中に洗濯物が残っていると干す間隔を詰めてでも干してしまう。

〈改善点〉

①「ストップウォッチの音がなれば作業の始まり」という工夫も考えたが、登校児童の対応や洗濯物の量により洗濯が終了する時間が不定なので、難しいのではないかと。職員が、作業の始まりと終わりを声かけで提示することになった。

②洗濯物が入っているカゴが空になれば、干す区画が余っていても作業は終了とする。

③Oさんが干す物を入れるカゴを専用にとできるとよいが、他の利用者も洗濯物を干したり運んだりしているので、実施が難しい。カゴについては今まで通りとして、職員からの声掛けで干してもらう物を指定する。

3. 今後の改善

第5回のコンサルテーションで、コンサルタントに洗濯物干しと洗面台の掃除・食堂の掃除作業の映像を観てもらい、アドバイスを受ける。

〈活動の手助けとしての声かけ・指導のポイント〉

①声かけ・指導した所をまとめておき、それを分析する。その箇所について、どの様にしているか再検討する。

②活動を終えた後に何をするのか、提示できるとよい。そこがはっきりしていないと、ウロウロするだけになってしまったり、問題行動につながることも考えられる。自由時間に何をしたいのかわからないということも考えられる。自由時間にすることを提示すれば、過ごし方が変わるかもしれない。

〈ワークシステム（活動の4つの点）〉

- ①どの様にするか
- ②何をするか
- ③どれだけするか
- ④終わった後どうするか

この点を、活動の計画、実施、評価、再検討に活用していく。

Case

9-2

本人評価を経た「洗濯する衣類運び」の実践

Pさん、女性、20歳代。

トイレは、股間を指して伝える。自分でできるが、拭くことはできない。食事に集中しないことは多々あり、荷物運びなどの作業を依頼しても続かない。着替えは声かけをしないと動かない。

男性の部屋のある階に行き、何度も注意されている。実習生や新人職員、他の利用者の男性に、おへそを触ったり胸をアピールしたりしながら近づくこともある。

外出して知らないところに行くと、泣いてしまう。建物に入るのを泣いて嫌がる。

1. Pさんの評価

Pさんの評価も、第3回のコンサルテーションで行った。

- ①おかし・飲み物の写真のマッチングを行ったが、できなかった。
- ②色カードのマッチングもできなかった。
- ③ボールペンの組み立ては、自分からは動こうとせず、キャップを渡されるとはめた。次も、自分で取ろうとせず、渡されたキャップをはめる。3本目は自分でペンを取り、キャップをはめる。完成品を持ったままでおり、「ここに入れる」と指示されて入れる。その後も自分ではようとせず、声を掛けられたり、渡されたりして動く。
- ④「食器重ね」をしたところ、Pさんは同じ食器の上に重ねられず、「ここ」と指示されて置いた。

2. 取り組み内容

Pさんは、入浴後のよごれものを風呂場から洗濯場まで運ぶ活動を実践することになった。

まず、担当職員（代行も含む）と一緒に、上靴を履いて風呂場に行く。洗濯するものが入った2つのカゴを持って玄関に行き、置く。1つのカゴを洗濯場まで運んで置き、玄関に戻る。もうひとつのカゴを再び洗濯場まで持って行って、置いて戻るという手順。

〈10日後に施設内で検証〉

上靴を履いていくことと、洗濯するものが入ったカゴを洗濯場まで持っていく動作の始まりは声かけが必要だが、運び出してから行動は比較的スムーズ。声かけができなかった時は、通路の門の前まで2カゴ持っていき、そこに置いてから1カゴずつ運んだ。その後、風呂場か

ら2カゴを持ってきて置く場所を、玄関から通路の門の前に変更した。

〈1か月後に施設内で検証〉

上靴はかなり意識して履くようになってきた。洗濯するものが入ったカゴは、やはり声かけをしないと、風呂場から持たずに出てこようとすることが多い。

風呂場から運んでもらうカゴを目の前に置いてみたり、Pさんが入浴・着替えが終わる時間にカゴを運べる状態になるように調整しているが、やはり声かけが必要な状態である。

風呂場からカゴを運び出した後の行動は、ほぼできている。

〈アドバイス〉

第4回コンサルテーションでPさんの活動状況を報告し、アドバイスをもらった。

- ①カゴを運んでもよい状態の判断がPさんにとって難しいため、指示待ちになると考えられる。コンサルタントと共にお風呂場に行き、検討。お風呂から出る時に上靴を履くので、カゴが運べる状態になれば、上靴の靴脱ぎ場にカゴを置いておき、お風呂から出る時にカゴが目に入るようにしてみる。
- ②徐々に手助けの度合いを減らして、自立して取り組めるように配慮していくことが必要。指示を計画的に減らす際は、言葉での指示・声かけは減らしにくいので、見本を見せる・手を持って一緒にするという手助けの度合いを減らすようにしていく。

3. その後の経過

風呂場から洗濯するものを入れたカゴ2つを持っていける状態になったら、職員がカゴを上靴脱ぎ場に置く。そこに置いてあれば持って行くということをPさんに伝えて、意識づけるようにした。それでも、声かけをしないと風呂場から出なかったり、カゴを持たずに行こうとすることがある。「出るように」と言うだけだと、カゴを持たずに風呂場から出ていこうとする時がある。呼び戻してカゴを指さすと持っていく。

カゴを置く場所を、風呂場内の上靴脱ぎ場ではなく、出たところに置くようにした。戸を開けて出ようするとカゴが邪魔だったりつまづいたりして気づき、自ら持っていけるようになった。「出てよい」という声かけは必要。

細いところを通るのにカゴを前後に持ったり、カゴが重い時は一旦手前に置いてひとつずつ持って通ったりという工夫も、自分でしている。自分の仕事として、定着してきた。風呂場に行く時に上靴を履くのは、声かけをしないと忘れていた時がある。

4. 今後の改善

第5回のコンサルテーションでコンサルタントに活動を報告し、アドバイスをもらった。

- ①「決まった所に置かれているカゴなら運んでもよい」といったことは、Pさんにはわかりにくいかもしれない。現在行っているような戸口の前への設置は、自分で気づきやすい。続けてみてもよいのでは。
- ②「ものを運ぶ」という機会自体を増やすことで、物を運ぶ意識を持ちやすくなるかもしれない。
→食事前に食堂の椅子をテーブルから下ろす活動をしてみるようになった。
- ③今回のケースに限らず、本人の特性を見てのプログラムづくりが大切。例えば、抽象的なプログラムは、抽象的なものの理解が難しい人には合わない。また、具体的なプログラムは、習

慣としてできていたことが、プログラムが具体的であるがためにプログラム以外のことについてどうしていいのかわからなくなる状況を招くこともある。さまざまなことがあり得るので、計画→実施→見直し→計画のサイクルが必要になる。

ふりかえり・まとめ

- 自閉症について様々な研修を受講してきていたが、今回は基礎を含めた講義もあり、まだまだ理解しきれていないことがたくさんあると知った。
- 今まで、講師と共に実際に利用者をモニターとして検証することがほとんどなかったので、実践的な方法を講義していただき、職員全体で考えるという形の研修はよかったと思う。
- 個別支援として何をするのか明確にし継続していくということは、普段取り組んでいるようにいって実際はできていないことがある。今回の研修を通して、自閉症を抱える人の特性を生かす（生かし方）、次へのつなぎ方等を勉強することができてよかった。
- 活動の計画を立てていても、実践が難しかったり、検証できていなかったことがある中で難しさを感じていたが、全員を検証しようとしてしまうことがその原因であることに気付かされた。これからは、少人数でもいいので、ゆっくりと時間をかけることが必要だと感じた。
- 場面の構造化など、今まで施設内では、行えていなかったことがあり、自閉症を抱える人にとっては生活しやすい環境もあったんだと考えさせられた。
- 自閉症を抱える人の特性（こだわり等）をうまく日中支援・活動に生かしていくことができれば、大きなステップになるだろうし、次につなげていけると考えさせられた。そのためには、自閉症を抱えた人たち一人ひとりに合わせた日中支援等をしていかなければいけないと強く感じた。
- 今回の研修で、職員の意識が変わってきたことが一番大きなことだと思う。支援したいと思っ
ていても、意見が出し合えなかったり、これでよいのかという迷いがあったが、「これでいいんだ」という方法を理解していけたと思う。
- 今回の研修で、自閉症を抱える人たちの支援の方法を学び、それを取り入れて、どんな障がいがあっても生活しやすい環境を作っていくことや、利用者をひとりでも多く地域へ移行できるように考え、実現できるようにしていく意識を持ち、日々の支援につなげていきたいと考えた。その中で、具体的に、色々なことを利用者と職員全体で話しながら進めていけること、そのようにしていこうと考えさせられたのが、一番の学びであった。

障害者支援施設／生活介護

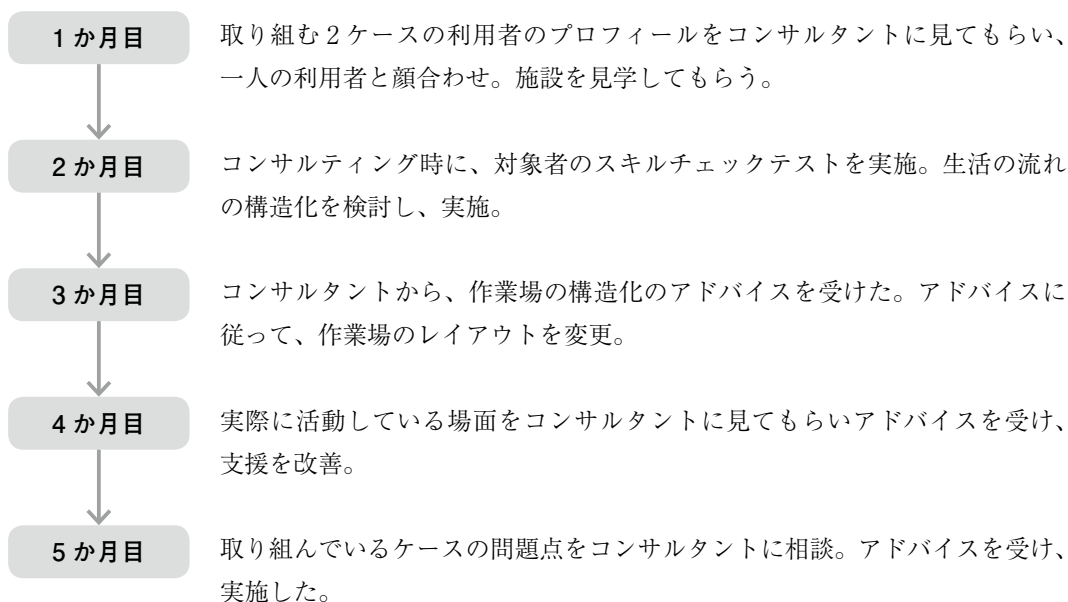
ねらい・背景

利用者の高齢化が進んでおり、身体的介護が必要な人が増えている。また、そのような利用者に、パニックを起こした利用者が粗暴行為を起こし、怪我をさせてしまうことも度々起こっていた。

行動障がい重い利用者に対する支援が不十分な点は、大きく分けて3点あったと感じる。1点目は、職員の知識不足である。知識不足からどう接していいのかわからず、パニックにだけ焦点をあてて、その根底にある理由をわかろうとしないという支援が目立った。2点目は、職員も多く利用者も施設利用が長く、広い空間に慣れていて、慣れない利用者の個別化が進んでいなかったことである。個別化については、行っているケースもあったが、構造化された空間はまだ皆無だった。3点目は、スケジュールが崩れた利用者に、もう一度スケジュールを理解してもらうことが必要だった。

以上の点から、コンサルテーション事業を受ける運びとなった。事業決定後、緊急性がある利用者は誰なのか、職員間で話し合いを持ち、結果2名の自閉的傾向が強い利用者をピックアップした。

流れ



食事が待てない >>> 食事前の流れの構造化

Qさん、男性、40歳代。療育手帳A判定。自閉傾向。

食事が待てず、人を引っ張る、叩く等の不適応行動が見られる。要求が通らないと粗暴に至ることが多くみられていた。

草やプラスチック等の異食行為も目立ち、そのことから、イレウスになり入院することが去年は3度あった。

1. スキルチェック～構造化

第1回コンサルテーションでコンサルタントと顔合わせ。Qさんは、厨房の裏の窓から食事の配膳の様子を見て過ごしていた。

コンサルテーション2回目に、スキルチェックテストを実施。プットインの活動ができることがわかった。

まず取りかかったのは、食事前の構造化だった。コンサルタントから「何かをすれば食事という流れを作ってみては」と助言いただき、スキルチェックの結果も受けて職員間で話し合い、食事前の活動として「洗面、靴下を履く、靴を履く、帽子をかぶり食堂に行く」という流れをつくり、実施した。

2. Qさんの様子と支援の変更

従来は食堂前でずっと待っていたQさんが、構造化から1週間程過ぎたあたりから、声かけでいったん生活棟に戻ってくるようになった。

次に問題になったのは、食べなくなると、生活棟に帰って来ては、帽子以外のことを自ら勝手にに行い、職員を引っ張り強引に食堂に行こうとすることだった。そこで、靴下、靴に関してはいつも履くようになっていたので、「洗面、自立課題（3段ボックスにプットイン課題2種類、型はめパズル）、帽子をかぶる」という流れに変更して様子を見ることになった。少しずつ慣れてきたのか、半月くらいすると洗面後に職員が課題を準備する間、作業場所で待てるようにまできてきた。

しばらくその状況が続き、その後、Qさんの作業スピードがどんどんと早くなってきた。そこで、翌月からボックスを4段に変更し、出し入れもQさんが行うことにした。その後、5段ボックスを使用し、課題のレベルも上がった。

3. 検証

コンサルテーション開始以前から7か月に渡り、興奮した回数を計測した。

1 か月目	2 か月目	3 か月目	4 か月目	5 か月目	6 か月目	7 か月目
20 回	18 回	13 回	10 回	10 回	12 回	10 回

現在の横ばい状態の理由をあげると、最初に洗面を入れたことにより、自分の洗面器ではなく、他利用者の洗面器を持って職員に訴えることが増えてきているためである。

不適応行動が食事以外の場面（喫茶タイム時など）で多々見られるので、食事以外での流れを今後考えていく必要がある。

4. 自立課題のボックスの見直し

コンサルテーション3回目に作業場の構造化のアドバイスをいただき、作業場のレイアウトを変更した。

その作業場で、Qさんはお菓子につられてやってきては、食事前の活動に近い自立課題を行っていた。異食があるため職員の見守りが必要であることと、お菓子に目が行き、お菓子の要求をくり返し、なかなか課題に集中できないことが続いていた。

コンサルテーション5回目に、Qさんの問題点を相談した。Qさんは自立課題のボックスの意味を理解できていないのではということで、5段にしていたボックスを4段に戻し、4段目にはお皿を置き（お菓子につながるもの）、理解してもらうようにとの指示があり、実施した。はじめは行うことよりお菓子に興味がいってしまっていたが、現在ではずいぶんと作業自体に慣れて行うようになってきている。また、作業スキルの高い利用者には、指示書を使った活動を入れてみてはどうか、休憩はできるだけ長く取れるようにしてあげた方がよいとアドバイスを受けた。



Qさんの居住棟用課題

Case 10-2

多動 >>> スキルチェックと活動場所の見直し

Rさん、男性、40歳代。療育手帳A判定。自閉傾向。

視覚過敏で多動になりやすく、好きなものがあるところなら、園内のどこにでも走って行ってしまう。また、母子分離ができておらず、施設での生活と、在宅での生活が半々程度になってしまい、そのことから施設での生活に見通しが立たなくなっているのではという見解を職員間でしていた。

1. スキルチェックとその後

コンサルテーション1回目にコンサルタントにRさんのプロフィールを見てもらう。2回目には、Qさんと同じくスキルチェックテストを実施した。

その後、なかなかゆっくり過ごせる場所の提供ができず、多動な毎日を送っていた。コンサルテーションの日と帰宅が重なり、前に進まない状況であった。

2. 作業場でのRさん

作業場の構造化後は、職員が近くにいることが安心につながったのか、トイレ以外はじっと座っている



Rさんの活動場所
(ここでは落ち着いています)

られるようになっている。しかし、活動がない日でも、作業場の鍵が開いているか見に行くので、行動範囲が広がったという点においては、活動場所として失敗だったのかとを感じる。

Case 10-3 作業場の構造化

コンサルテーション3回目に、新体系移行に向けての作業場の構造化のアドバイスをお願いした。自分たちだけでは、漠然としか考えられなかったことが、必要備品や設計図のおかげで、ずいぶん形になってきた。別のコンサルタントにも訪問いただき、動線をシンプルにするべく利用者の特徴や部屋のレイアウト全般、ワークシステムの取り入れ方等のアドバイスをいただいた。

現在その作業場で、Qさん・Rさんを含む9名の利用者が活動している。Qさん・Rさん以外の7名にも、いろいろな問題点がある。手先を使う作業は得意だが、スケジュールの理解ができていないため不穏な行動をとることがある、視覚優位で物を収納してしまう、指示待ち傾向が強い、など。そのような利用者が活動できるようにするには、どのような手法を用いるかということが課題であった。



活動場所



休憩のための砂時計



スケジュール



課題置き場

Case 10-4

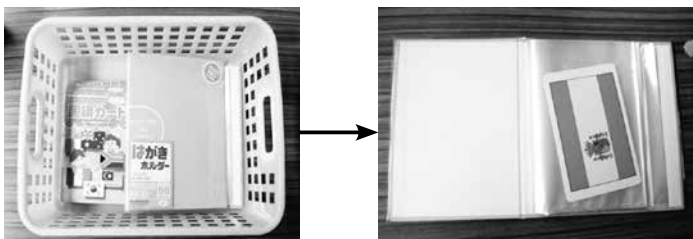
手順書の作成

利用者というよりは対応する職員にどのような課題なのかわかるように、手順書を作成した。

活動：カード収納

準備物：白い籠1個・はがきフォルダー・国旗カード

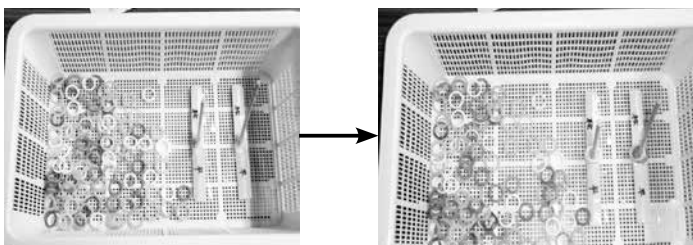
手順：準備物を用意し、国旗カードをはがきフォルダーの中に収納してもらう。



活動：ワッカ通し

準備物：白い籠①

手順：白い籠①を用意し、ワッカを棒に通してもらう。全て通し終わると終了。



今後の課題

定められた活動場所では過ごせるようになってきているが、2名とも活動がない時間や休みの日には、予定がないのでパニックが起きやすい。また、強化子がお菓子になっているが、お菓子以外に好きなものが見当たらないことが挙げられる。今後、余暇活動をどのように行っていくかを検討していく必要がある。

活動班全体として、活動場所ですごすことができるようになったので、これからの自立課題の充実が挙げられる。また、今回のコンサルテーションを活動班以外の職員、利用者にもどのようなかたちで還元していくかが課題となる。

ふりかえり・まとめ

コンサルテーション事業を受けて、利用者を知ることの大切さを再認識した。

評価をコンサルタントにいただいた結果、この活動ならできるのではないかという想像ができるようになり、実行に移すことができた。また、失敗したら、どうすればうまくいくかを考えるという流れができてきた。いつの間にか考える機会が多くなっていったように思う。

まだまだ問題ばかりで、これで満足してはいけませんが、第一歩として、「考えて行動する」「障がい特性を知る」「利用者の個別化」を念頭に置く支援が、少しでも身についたことがよい経験になったと感じている。

障害児通所

ねらい・背景

定員の約半数の子ども達が毎年入れ替わる療育施設で、毎年個々に合った支援を考え、集団での療育を試行錯誤しながら取り組んでいる。現場では写真などを使った視覚支援を部分的に取りいれたり、部屋内をパーティションで分けるなど環境調整を行ってきたが、より子ども達が生活しやすいように園全体で取り組める支援の具体的な方法や職員へのスーパーバイズをいただき、職員全体のスキルアップをねらって、今回のコンサルテーションへの申し込みに至った。

流れ

(A組)

1 か月目

朝のかばん整理の順番待ちの間遊んでしまい、大人の手助けが必要だったり時間がかかったりしていた。子どもがかばん整理を行う動線を考えて、パーティションやマット、待機椅子などで物理的構造化を取り入れた。

2～7 か月目

待つ時の椅子の場所を変えたり、見て楽しめるものを用意するなどした。遊びの場面でも、待機が必要な時にかばん整理の時と同じマットを使用。大人の手助けが減り、片付けの時間が短縮された。

(B組)

1 か月目

カバン整理の際の片付けかごの位置を変更。自発的に片付けるようになった。終わる時間や次の活動がぼんやりしていたため、活動の終わりに合わせてタイムタイマーを使用。次の活動の具体的な写真を提示すると、スムーズに移動できた。給食の食べ終わりが決められないなどの児童の個別対応にも取り組む。

2～7 か月目

イライラして他害が見られるため、休憩ルームを設置。クールダウンできたり、刺激が軽減された。継続するにつれて、子どものほうから休憩ルームに移動したいことを大人に伝える場面がうまれた。

(C組)

1 か月目

朝の会やあそびの時間に、大人への注目が低く、今から何をするのかを理解して活動している子どもが少ない。大人がどの位置からも見えるように、朝の会の机は円卓に変更し、スケジュールを子どもから見えやすい壁に掛け、具体物を提示すると、興味を持って見るようになった。また、広いスペースで行わず刺激の入りにくい端で行うことで、集中できている。

制作活動でも手順書 2～3 枚を実物で提示。自発的な取り組みが見られる。
大人への注目が増え、自分の好きな絵本やおやつなど、実物や写真カードから選択する経験が少しずつできるようになる。

Case 11-1

登園後のカバン整理と「待つ」場所の工夫

A 組では、登園後のカバン整理と待ち時間に過ごしやすいような取り組みをした。

1. 活動・作業内容

午前 10 時の登園時のカバン整理に取り組んだ。

入室後すぐに取り組めるように、かばん置きまでをパーテーションで仕切る。一気に入室することにならないよう、玄関からは時間差で部屋に戻るようにする。人数が重なった場合には、パーテーションの裏側に椅子を用意して待つ場所を設けた。

朝の会で使用する机や椅子を出すなどで職員が動く時に子どもが待てるよう、待つ場所をわかりやすくするため一定の場所にアンパンマンのじゅうたんを敷いておいた。続けて取り組む中で、1 人 2 人と少しずつ理解してきている様子。”待つ”ということがわかる子どもは、大人をモデルに、座りにきて一緒に手あそびをしている。

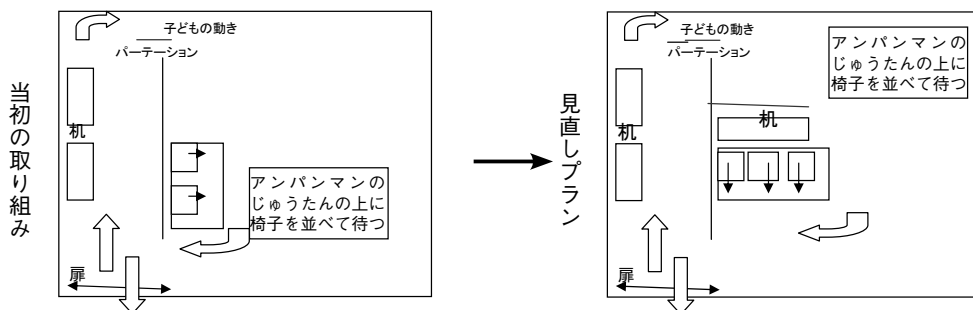
2. 問題点

- ・ 待つ場所の側には広い空間ができ、椅子に座っていても遊んでしまう。
- ・ 遊びたいので、カバン整理の反対側のエリアに自ら行こうとする姿が見られる。
- ・ 時間差で対応しているが難しい。時間差を作るにも限界がある。
- ・ パーテーションを倒すことがある。

3. 見直しプラン

- ・ カバン整理の場所を入り口の扉付近のすぐのところにした。机を置きパーテーションを設置して、奥が見えないようにした。
- ・ カバンはロッカーに片づけることから大きめの 1 つのかごに片づける。
- ・ 着替えを自分のかごに片づける取り組みがある（支援計画の中に取り組みが入っている）子どものみ、服のかごを机の上に出しておく。
- ・ 待つ場所では、ドア側に向かって座るようにする。

コンサルタントからは、変更後の待ち方だと色々な場面で般化できること、待つ場所にグッズ（絵本・おもちゃなど）を用意するといいいこと、個別での対応が必要であることなどのアドバイスを受けた。



4. その後の姿

かばん整理に毎日くり返し取り組む中で、子どもたちも一人でできる姿が多く見られるようになった。入ってすぐパーティションで仕切られていることで刺激が少なくなり、集中力が途切れにくく、かばん整理をしてから遊ぶ（プレイルーム）という流れは、半数くらいの子どものみで定着している。

かばん整理を嫌がっていたり、時間を要していた子どもが、職員の見守りだけで取り組めるようになったことはとても大きい。時間も今までの半分くらいである。

一方、部屋の扉半分が開いていることから、部屋を出て行ったりプレイルームへ向かう姿もある。また、他児の影響を受けやすい子どもは、他児の状況によって取り組みにくい場合もあった。かばん入れは、今までの取り組みが定着している子どもはかばん入れのかごではなく、自分のロッカーまで片づけにいつている。

「待つ時間」にアンパンマンのじゅうたんを使用したところ、待つ場所を意識できる子どもは「アンパンマン」と言ってじゅうたんを出して欲しいことを職員に伝えるなど、定着しつつある。だが、手あそびなどでは関心が薄いこともあり、座りたくない、椅子を運びたいといった姿も見られた。

コンサルタントからは、「待っている時は見てわかるような物がよい（ペープサート等）」とアドバイスを受けた。

他の活動の時にも、絵本を見る時等の“あそび用”のじゅうたんとは別にし、待つ経験をするあそびの時は同じアンパンマンのじゅうたんを使用することにした。

Case

11-2

集団生活場面の工夫と個別児童へのカード活用

B組では、登園後のカバン整理、朝の会、給食、おやつ、休憩ルーム、降園時の場面などを見直した。また、Sくんの個別支援に取り組んだ。

1. 朝のカバン整理

部屋に入ってすぐに片づけかごが見えるようにすることで、子どもたちが自ら片づけ始めるようになり、大人が手伝うことが減っていった。

最後にカバンを入れるカゴにプレイルームの写真カードを置くことで、片づけが終わると自分で確認して、プレイルームに向かう子どもも見られるようになって来た。時々、パーティションに隙間があると気になる子どももいるので、見えないようにする必要があった。

2. 朝の会

部屋でやっていた体操をプレイルームで行うようにした。部屋が広いので、思いきり体を動かして覚醒して部屋に入るようにした。

体操（動の動き）とお返事（静の動き）を部屋で区切ると、子どもたちも切り替えやすいように、落ち着いて席に座れるようになった。

3. 給食（片づけ）

食器の片づけも、器別にカゴを用意することで分別して片づける姿が見られるようになった。

食器、給食袋の片づけが終わると、プレイルームと休憩ルームの好きな方を選んで遊びに向かっている。

4. おやつ

2グループに分かれておやつを食べるようにした。部屋もパーテーションで区切り、おやつゾーンと絵本ゾーンに分けた。ゾーン分けをすることでおやつをスルーして絵本に向かう子どもがいなくなった。また2チームに分けることで、職員がおかわりの要求に対応できるようになった。

5. 休憩ルーム

お絵かきセットや音楽が流れる玩具などでゆっくりと遊べるように設定し、主にクールダウンの場所としても使用した(右)。

プレイルームでの人の多さや声などからイライラしそうになったら休憩ルームに移動するようにすると、子どものほうからしんどくなると“移動したい”と手を引くようになった。

しばらく休憩ルームで過ごすことで、落ち着いて次の活動に移ることができた。



6. 降園

タイムタイマー(右)で終わりを伝え、職員の「しゅうりょう!!」の声掛けに合わせて子どもたちも一緒に絵本の片づけを始めている。

片づけが終わると、自分の席を探して座れるようになってきた。



7. Sくんへの対応

Sくん、4歳。食べることが好きで、食べ終わりが決められない。給食時に際限なく食べないと満足できず、怒りだす。

睡眠障がいがあり、気持ちが不安定になりやすい。発語なく、要求はクレーン操作で伝える。写真カードでのコミュニケーションがとれるようになってきている。

- 「おかわりカード」(4回分、右)を作成し、伝えながら使用することで、納得して食事を終えることができるようになった。おやつなど、まだおかわりが欲しい様子が見られたが、かんしゃくを起こすことなく過ごせている。給食後、次の活動に移行できるようになった。
- 左からカードを取っていく方法は、定着が見られない。大人が取るカードを指さして伝えるようにした。
- 遊びファイルでは、好きな物を選んで大人に要求する様子が見られる。物が写っているとわかりやすいようで、バランスボールやおもちゃを選ぶ。
- “こそばしあそび”が好きで、大人と子どもが“こそばしあそび”をしている様子の写真カードを使用していたが、わかりにくいのか選ぶ様子が見られない。手袋の写真に変更して、大人



が手袋をつけて“こそばしあそび”をすると、よく選ぶようになった。今後、抱っこあそび、マッサージなどの写真カードも変更していきたい。

- 部屋をパーティションで区切って、布団、ビーズクッションを用意してクールダウンできるスペースを用意した。本児がイライラしたり、納得がいかななくてかんしゃくを起こしたら、大人と一緒にそのスペースに入るようにすると少し落ち着ける様子であった。くり返し行う中で、気持ちがしんどくなると自発的にそこへ移動して落ち着くまでそこでゴロゴロと過ごすようになる。Sくんの中で落ち着くと、自分の席に戻ってきている。

Case

11-3

絵本選びと設定あそび・制作の支援

C組では、絵本選びと設定あそび・制作の支援に取り組んだ。

1. 朝の会・おはなし

〈活動内容〉

実物の絵本か絵本ファイル（右）から好きな絵本を選ぶ。

〈子どもの様子〉

- 3冊の絵本を見比べて、すぐに好きな絵本を持つ・触る・カードを抜き取ろうとする。
- 何を要求されているのかわからずにいる（子どもの正面で実物を置き、めくってみるなどすると見たい方を開けようとする）。



〈問題点〉

- 取り組み始めであるので、慣れることで意志を伝える経験がもてるようになっていくであろうが、全員に同じ提示は難しい。絵本以外のものでの選択にする。
- スケジュールを示すための実物は、立体や重い物など様々なので、壁掛け式でなく自立式のカゴで作成する必要がある。

2. 設定あそび・制作

〈活動内容〉

大人のモデルや手順書を見ながら、2～3つの工程の制作やクッキングをする（ちぎる・切る・貼る・ビーズを通す・ソースを塗る・入れてボタンを押すなど）。

〈子どもの様子〉

- 今からすることが実物で提示されていることで手がかりになっている子どもが多く、自主的に取り組もうとする姿もあった（3個までの工程で、左から右への作業とした）。
- 身体的プロンプト・指差し・声かけなど、個々にあわせて大人の援助は異なる。

〈問題点〉

- 制作の課題については、個々にできる範囲が異なるので、提示する手順書や見本をその都度変更する必要があった（いくつかのバージョンを作成しておく）。

ふりかえり・まとめ

- 朝のかばん整理、おやつ時などは、周りに見えるものを制限することで“今すること”がわかりやすくなり、子どもたちから行動するようになった。また、パーテーションで活動ごとに部屋を区切ることで、活動の切り替えがしやすくなった。朝の会やおやつでは子どもたちから自分の席を探すようになり「席にすわってね」など大人から声を掛けることが減った。子どもたちも周囲の様子を見られるようになってきたこともあり、周りの様子を見て真似して取り組む姿も見られた。身体測定の日や、制作の取り組みの時なども、部屋を区切って行っている。
- 大人への注目が意識してできるようになり、朝の会の参加ができ、絵本も集中して見る時間が増えた。
- 朝の会の円卓を部屋の隅に寄せた。外部からの刺激が軽減できた。

↓

- * 物理的構造化によって、子どもの力が発揮できる場面が増えた（まだまだ改善できる場面は多いが）。
- * 集団で行う設定療育ではあるが、個々がどう理解して取り組めるのか具体的な案を出しながら集団の療育を考えることができた。
- * 全体のスケジュールを提示する場合、数名が理解できるものではなく、一番理解が難しい子どもたちの辺りに合わせることでクラスがまとまっていったように感じた（子どもの様子に合わせて修正は必要）。
- * アドバイスを受け、現場で実践にすぐに生かせることとそうでないことはあるが、修正してみるのはひとつの解決方法であった。
- * 近親の評価も大切だが、第三者の評価は、改めて振り返りができる貴重な時間だった。

コンサルタントとのQ & A

- Q. 保護者とのやりとりの中で、難しいケースはどう対応するのか？
- A. 保護者とのトラブルは「話がしっかりできていたか」が重要。保護者が何を感じているのかをまずは聞かなければ、ただの一方的な押し付けになる。話のできる機会を設け、しっかりと保護者の話を聴くことが一番。信頼関係が築けていない職員とでは話が平行線になるので、時には保護者の対応を別の相性のいい職員と交代して解決することも対応の1つ。
- Q. 4月から新クラスになるが、スケジュールの提示は現状のままでいいか？
- A. 4月にクラスの子どもたちの評価をできるだけ行うことにして、とりあえず現在あるもので進める。5月には修正したものが提示できるのが理想（最大公約数的な提示＋個別の提示の組み合わせが理想）。評価するにあたっては、何ができるのか（スキル）を知り、集団で使える物を考えていく。

評価方法：セッション（1対1）。

構造化されていない課題とされている課題を用いる（特性がわかる）。

障害者支援施設／生活介護

ねらい・背景

コンサルテーションの対象となった利用者について、支援を続けてきたがなかなか成果が上がらなかった。その中で、自閉症支援についてより多くの経験・知識を持っておられる方とやりとりすることで、対象利用者の支援を進めることがねらいであった。

また、外部の方の意見をいただけるということで、「独善に陥ることなく、より視野の広い支援を行う」ということを、現場の若いスタッフが経験することも目的であった。

流れ

1 か月目

コンサルタントとやりとりしながら、支援の方向性を確認し合った。何に対しても言えることであるが、ひとつの課題に対して、いくつもの解決方法があると思われる。それを確認する作業を行った。

2～7 か月目

確認し合った方向性にそって、具体的に支援を進めていった。まず、対象となる利用者が好む活動をリサーチし、それを行えるように組み立てを図った。活動としては、自立課題・音楽鑑賞を取り入れた。それらの活動を自立して行えるように、支援を行っていった。

Case
12-1

相性のよくない利用者とトラブル >>> 居室での余暇活動の充実

Tさん、男性、20歳代。療育手帳A判定、障がい程度区分6。知的障がいを伴う自閉症。Tさんは日常生活のほとんどの時間を居室ではなく、リビングなどで過ごしていた。リビングには、Tさんと相性のよくない利用者（以下、Uさん）が過ごしており、Uさんに必要以上に関わられることで状態を崩してしまうということがあった。このことから、Tさんにとっては、Uさんが過ごされているリビングよりも、居室の方が落ち着いて過ごすことができるのではと考え、それに向けて支援を組み立てていくことになった。

1. Tさんの行動の仮説

Tさんの支援を組み立てていく上で、まず、「なぜTさんはリビングに来るのか？」という疑問に対して、仮説立てを行い、支援の方向性を明確なものにするところから取り組んだ。

支援開始前のTさんの生活は、楽しみとなるような余暇の活動もこれといってなく、ご飯を

食べて、お風呂に入って、寝る、というような単調な毎日のくり返しだった。私はここに疑問（なぜTさんはリビングに来るのか？）に対しての原因があると考え、「Tさんは楽しい活動がなく、何もすることがないからリビングに来ているのではないか」という仮説を立てた。つまり、Tさんにとって、楽しみとなるような居室内での余暇活動を提供することができれば、Tさんの意識も活動に向き、リビングに来ることは今より少なくなるだろうと考えた。

2. 居室のレイアウト変更

Tさんが居室内で余暇活動を実施するにあたって、まず問題となったのが、活動を行う場所がないことである。Tさんの居室は、ベッドとタンスが置かれているだけで、誰が見ても殺風景な居室だった。そこで、Tさんが落ち着いて活動に取り組める環境にするために、居室のレイアウトを大幅に変更した。



変更前

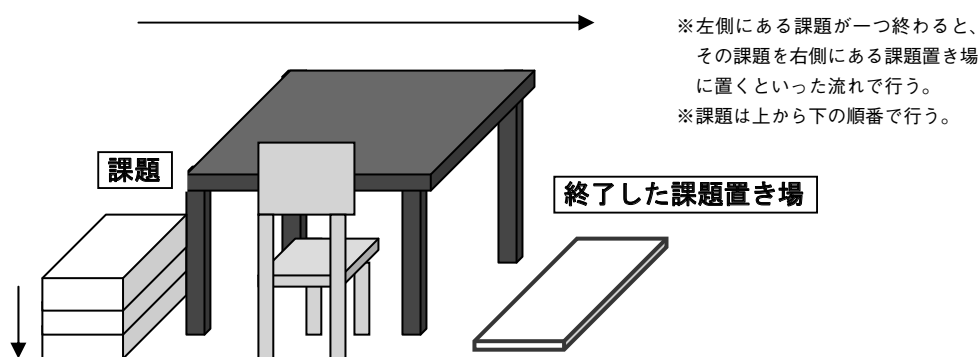


変更後

レイアウト変更では、パーテーションを使って明瞭な境界線を設けることで、「机では作業的な活動（衣類たたみ、自立課題など）を行う場所」「ソファはリラックスできるような活動（音楽鑑賞など）を行う場所」といったように、その場において「すべきこと」を理解しやすいように配慮した。これにより、「今その場で何をすればよいのかかわからない」ということで混乱することがないようにした。

3. 居室内の活動

次の段階として、Tさんの興味・関心があること、また得意なことから居室内で行う活動を決めた。音楽鑑賞、衣類たたみ、体を動かすことなど、Tさんにとって楽しみとなりそうなものはいくつかあり、そんな中でも一定の流れで行う自立課題（下）を居室内での最初の活動として実施することにした。



※左側にある課題が一つ終わると、その課題を右側にある課題置き場に置くといった流れで行う。
※課題は上から下の順番で行う。

その理由としては、一定の流れで行う自立課題は、

- ①何をするのか
- ②どのくらいの量をするのか
- ③どうしたら終わりなのか
- ④終わったあとどうするのか

が目で見えてわかる仕組みになっており、Tさんにとって“最も理解しやすい活動”と考えたからである（自閉症の人は、特性上「目で見えて情報を理解することが得意」と言われているため）。

〈Tさんが取り組んでいる課題の一例〉



①洗濯バサミと色カードを使った
色合わせ



②指定された色順に沿っての
紐通し



③クリップを使ってモノクロ記号
の絵合わせ

4. 自立課題の持つ意味

自分の力で最初から最後までやり遂げることで、

- ①活動に対する意欲、自信に繋がる。
 - ②作業／学習に関するスキル（生活場面の家事活動に活かせたりもする）が身につく。
- ということがあると考えられる。

3. の自立課題の流れは、日中活動の作業場面で既に取り組んでおり、実際に居室での活動として初めて実施したときも、スタッフの介入がほとんどない状態でこなせていた。活動時間はわずか10分程だが、Tさんは居室で課題に集中して取り組むことができており、Uさんを気にすることもなかった。Tさんにとって楽しい活動とは言えないかもしれないが、以前の活動が全くない状態に比べて、ひとつでもTさんが集中して取り組める活動を提供できたことは、小さいながらも成果があったのではないかと思う。

5. 音楽鑑賞を追加

上記の支援開始から1か月が経過して、新しい活動を実施することになった。Tさんは日常の生活の中で、歌を口ずさむ、流れている音楽に合わせて体を揺するなど、音楽を好む様子が見られていた。そのような様子から、上記で実施した自立課題の活動に加えて音楽鑑賞（イヤホンを使用してCDを聞く）を新しい活動として実施した。



Tさんは文字が読めないので、
CDに絵や写真を貼ってわかる
ようにしている

この活動は、Tさん自身に数枚のCDの中から1枚のCDを選択してもらい（写真）、CDプレーヤーで再生するという流れである。活動の終わりは、聞き終えたCD（Tさんにとっては、曲が終わり無音状態になれば終わり）を入れるツールを使用して、終わり方が明確になるようにした。

活動中のTさんの様子は、曲に合わせて体を揺すったりするなど、楽しんでいる様子が見られている。

6. 活動予定を写真で示す

Tさんには普段、写真カードを介して先の予定を伝えているが、各活動を開始するには必ずスタッフが介入しなければならなかった。そこで、Tさんの自立度を高める（スタッフの介入を減らす）目的で、活動を連続して行えるように取り組んだ。

Tさんの活動予定の写真を、上から音楽→自立課題→休憩のように、順に並べる。現状、まだまだ活動の種類が少ないため、限定した場面のみで連続して活動を行う取り組みをしている。今後、活動の種類を増やし、5～6個の活動をスタッフの介入なく取り組めるように支援を進めていきたい。

ふりかえり・まとめ

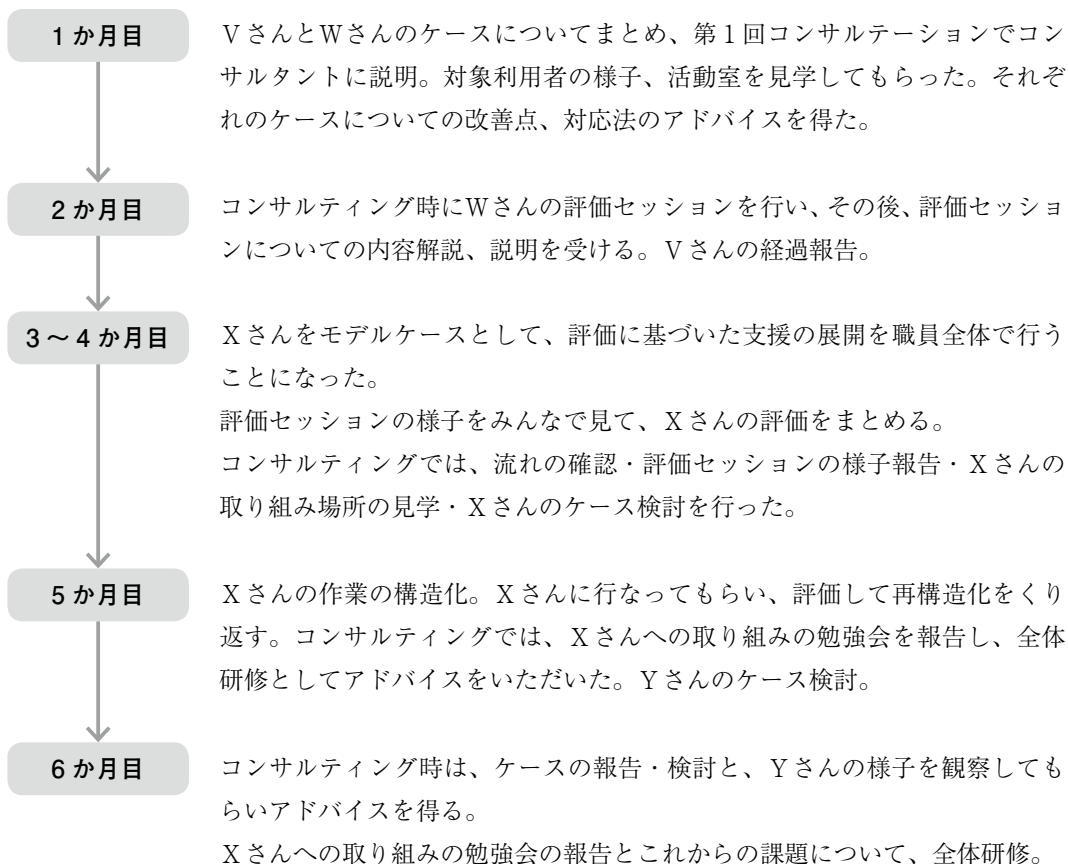
今回の支援でTさんが集中して取り組める活動を提供できたことはひとつの成果だと思っている。しかし、まだまだ活動が何もない時間が多く、その時間にリビングに来て状態を崩してしまうこと（相性のよくない利用者に関わられることで）があるのが現状である。今後の課題は、何もすることがない時間に、Tさんにとって楽しみとなるような活動を増やしていくことである。そうすることで、Tさんも楽しみな活動がある中で、落ち着いて過ごすことができるのではないかと思う。

ねらい・背景

自閉の特性を持っている利用者がひとつの作業室でグループを組んで活動していたが、個々のニーズに合わせた環境調整や支援ができず、パニックやトラブルが頻発していた。

そこで、コンサルテーション事業を活用して環境調整や職員のスキルアップをすすめ、よりよいサービスの実現をめざした。

流れ



Wさん、男性、20 歳代。

作業を中心に、散策やドライブ、制作、音楽を行うグループに属してきた。

日中、職員に自分を見てほしいという欲求が強く、その表現方法として他の利用者に手が伸びる、職員に噛みつく、手を大きく叩く、物を壊す、大声をあげる等の行動が見られた。その他には、男性利用者への興味、関心の強さ、お祭り、音楽、ちょうちん、旗が風になびくのが刺激となり急に気持ちが高ぶって高笑いされ、気持ちを落ち着けるのに時間がかかるなどの特徴が見られる。

職員が側に付いて対応していれば比較的穏やかに過ごすことはできるが、それも慣れてくると、更に職員への要求が強くなることがある。

数年前から上記の行動が目立つようになり、活動に参加できる状態ではなかった。他の利用者への影響やWさんの生活リズムを戻すために、集団から離れ別の部屋で職員と過ごしていただき、刺激を小さくするようにした。

職員間で不調の要因となっていることについて考えた結果、「・見通しの持ちにくさ
・口内炎 ・自宅での生活リズムの崩れ ・母と夜の散策に行けなくなった ・好きだった職員の移動 ・新しい利用者が入ったこと ・正月に韓国旅行に行けるかの不安
・ガイドヘルパーの不定期の利用 ・自慰行為 ・集団が大きい ・職員の対応がわかりにくい ・職員の入れ替え ・今の環境は刺激が大きい」などが考えられた。

そこで、小さな集団の中で、ある程度固定された職員、活動環境の中で過ごすことが必要と考え、Wさん用のテーブルを用意し職員もある程度固定して様子を見ることになった。

以前ほど調子を崩すことは今の所ないが、職員や活動の変更時には手を叩く、職員を噛もうとする、足を踏み鳴らす、物を手荒に扱う等の行動はある。作業への意欲も低い。昨年ケアホームに入居。週末はご自宅に帰宅している。

1. Wさんの将来像

「固定された環境、活動、職員」の生活から、変化、変更慣れ、地域に出ても適切な行動をとり、快適な地域生活（移動支援の利用など）を過ごせる。

〈第1回コンサルテーションでのアドバイス〉

職員、活動のある程度の固定、活動室の変更などは、Wさんの障がい特性を考えると情報が整理され一定の成果は見られている。しかし、その職員がいないと活動に参加できない、落ち着くことができない状況になり、人との関係から抜け出せない状態になることも考えられる。また、固定を強化することは、Wさんの生活場を狭めることにもなる。

少しずつ職員、活動の変化を加えて、変更はあることを理解していただく必要がある。またWさんの特性として、職員によって態度や見かたが変わるため、（場面と状況によってパターン化されてくる）職員とは一定の距離感を保っていく必要がある。

音楽や旗を見て興奮されている状態について

- 興奮した状態から不適切な行動が見られるのなら、支援者側が刺激のコントロールや調整を行う必要がある。
- ただし、Wさんの好きな刺激物をまったく無くすと、自分で刺激物を探して興奮してしまうことが考えられる。無くすのではなく、適度に調整していくことが必要。

何度も予定の確認をされることについて

- 見通しが持てないこと、職員とのやりとりがWさんのパターンになっていること、内容よりもコミュニケーション手段として確認されていることなどが考えられる。
- Wさんの中で、気持ちを上手く相手に伝えられていないのではないか、言葉数もあまりないのではないか。

自慰行為について

- Wさんに明確にTPOを伝えていく必要がある。

スケジュールの伝え方について

- Wさんがどこまで理解されているのか評価する必要がある。
→次回のコンサルテーションで評価セッションをしていただくことになる。

2. コンサルテーション以後の対応と様子

〈対応〉

担当職員が側から離れる、活動を変更する等の小さな変化を入れるようにしている。作業中に職員が側から離れると、作業の手を止めたり、その職員を探しに部屋を出ることがあるが、Wさんの休憩時に離れるのは、くり返し行うことで理解できた様子。

不適切な行動が見られた時には、否定的な声かけは控え、なぜそういった行動をしたのかを一緒に振り返るようにしている（Wさんにストレスとなっていた要因を一緒に確認する）。気持ちを聞き取り、職員が「〇〇が嫌だったんですね」と気持ちを代弁してから、その場で適切だった行動を伝える。ただし、それもWさんにとっては関わりの一部になり楽しんでいる様子。

職員と話さない時間が長く続くと、自分で刺激となる要因を探して、高笑い、大声で歌う、手を叩く、他の利用者にしつこく話しかける、手が出る、女性職員の髪の毛を触るなどの行動が見られる。結局、職員が側から離れられず、話し続ける状態が続いている。職員が側から離れた間待てた時や、他の利用者に丁寧に接することができた時、作業に集中して参加できた時などに、声かけで評価するようにしている。

〈家庭での様子〉

毎週金曜日は施設から一旦ホームへ帰り、夕食をホームで済ませてから母のお迎えで帰宅。帰宅中は母の通院に同行したり、レストランに出かけている。毎週の帰宅が楽しみなよう。

〈ケアホームでの様子〉

入居当初は夜中に目覚めて音楽を大ボリュームで聴くことがあったが、最近は21時頃に寝て、朝までぐっすり眠っている。時々、他の入居者とのトラブルもあるようだが、大きな不安定な行動等の報告は受けていない。施設ではホームの夕食の献立についてよく話しをする。

〈施設での日中の様子〉

コンサルテーション以後、1名の職員体制の変更があった。変更当初は気持ちの高ぶりが見られて、多弁であったり、高笑い、女性職員の髪の毛を触る等の行動は見られたが、次第にそういった行動も少なくなってきた。

担当職員の変更や金曜日の散策が雨のため中止になる等の変更時に以前では、大きな声を出す、他者に手が出る等の不安定な行動が見られていたが、最近は変更にも少しずつ対応ができてきている。

場面において（昼食後、帰園前）突然、高笑いされるなど、気持ちの高ぶりが見られている。

3. 評価

第2回コンサルテーションでコンサルタントによる評価セッションを実施。評価セッションにうち手の内容解説、説明をしてもらった。

評価セッションの結果はグループに持ち帰り、ケース会議の場を設け、Wさんの支援課題にあった提示方法、構造化等の具体的な支援方法について話し合い、実践、経過の記録、評価を行うこととした。

4. 対応の変更

- ・ 行動記録表の書式の見直しを行った。（前回コンサルテーションを参考に作成）
- ・ カレンダーを作り、帰宅日や行事の予定の記入を行った。職員間で予定を聞かれた際には「予定表を見てください」と返答することの対応の統一を行った。昼食時間や更衣の順番などについても記入用紙を作成している（予定を貼る場所は一か所になっている。）
- ・ ガーゼ作業では、今までは職員が準備をすることが多かったが、今は作業道具をWさんの近くに置き、自分で作業の準備が進められるようにしている。

5. 対応変更後の経過

- ・ 行動記録表は行動を印に（○・△・□など）することで記入がしやすくなった。
- ・ 1週間で1枚の記録表なので、経過が見やすくなりやすくなった。
- ・ カレンダーに予定を記入し、「予定表をみてくださいね」と対応を統一することで、始めた頃は、声をかけると手を叩いたり、カレンダーを外そうとされたりする行動が見られたが継続していくことで次第に納得される様子が見られている。一定の効果が見られている。
- ・ 作業道具を近くに設置したことについては、手順を伝えることで、自分で作業を進められている。が、作業の手順、内容には興味、関心がみられないため、職員が見守り、声かけをしないと丁寧にはできていない。今後も見直していく必要がある。
- ・ クリスマスやお正月というイベントもあり、興奮して落ち着かない様子が見られた。年明けの通所後は、生活リズムの崩れから活動に参加せず眠る日が続き、刺激に対しても敏感だった。その後は眠ることも少なくなり、活動にも参加している。
- ・ ケアホームを訪問し、副主任や世話人と会議を予定。

Xさん、男性、30歳代。

- 言語はなく、要求や確認は大きな声で「アー」と叫ぶ。
- 職員をみると大声で叫び、他者にかなり影響がある。
- 吐き戻し、衣類を破るなど、自己刺激的な行動が多い。
- 車のクラクションを鳴らす行動もある。
- 個別に缶作業を行うことで落ちついているが、確認の声や自己刺激的な行動は減らない状況である。

Xさんをモデルケースとして評価に基づいた支援の展開を、施設全体の職員でおこなっていくことになった。第3回コンサルテーションで、コンサルタントにXさんの取り組み場所（缶作業リサイクル倉庫、Ⅱグループ活動室）を見てもらい、アドバイスを受けた。

〈缶作業についてのアドバイス〉

- 作業場所と休憩場所の整理が必要。評価セッション中も周りを気にしていた。
- 現在の方法は、バケツ1杯に缶を入れ、その缶を潰してもらい、ある程度潰した缶がたまると、その缶を袋に入れてもらっていたが、1つずつ潰して入れていく、という工程の方がわかりやすい。
- 一度に提示する量も多いため、集中も切れてしまうし終わりが見えない。バケツにたくさん入れるのではなく、〇個（少ない量）を並べておこなう方が終わりが見え、やりやすい。
- 終わりがわかりやすいと作業に取り組む動機づけにもなる。
- 休憩の取り入れ方法について。1セット→休憩→2セット→休憩→3セットなど、この作業を何工程おこなう、ということをわかりやすくする。
- （実際に作業中の様子を見て）職員とXさんとの距離が近いから関わってしまう。
- 作業も内容は理解していても確認の声が多く、職員の声かけや促しで行動しているため自立していない。自立して取り組めるようにルーチン、ワークシステムでつなげていく。
- リサイクル倉庫内に棚を作ってみてもよい。

〈スケジュールの提示についてのアドバイス〉

- 予定を伝える場所、伝える言葉は統一する。
- Xさんの過ごすスペースに、活動や予定のカードを1枚だけ提示してみる。終了したらカードをはずし、Xさんが過ごしている机・椅子のカードを提示し、今いる場所がわかるようにする。

〈吐き戻しについてのアドバイス〉

- 自己刺激的な行動。適度な活動を入れないといけない。
- 場所を変えてみるなど、食べる→吐くというパターンを変える。場面と行動を変え、適切な方法でおこなう。

- ・ その行動だけを見るのではなく、嘔吐することになった背景も見る。
- ・ しかし、身体のことなのでこちらからコントロールできないので難しい。
- ・ 作業の組み立てのアイデアを食事場面や生活の場面に盛り込む。

1. Xさんの評価

12月に評価セッションを行った。すべての項目は行わず、1～20までの課題に取り組む。数字を知っていることがわかった。

次に、評価セッションの様子をみんなで見て、Xさんの評価をまとめた。全員で意見交換をする機会がなかったので、レポート形式で集約。視点にバラつきがあったものの、評価としてまとめた。

2. 缶作業の構造化

1月からXさんが普段取り組んでいる缶作業の構造化を行った。

①構造化前の状態をDVDで見てもらい、改善が必要なところを検討。

- ・ 周囲を気にしている様子が見られる。
- ・ どれだけ取り組むのかの確認が多い。
- ・ 職員の声かけが多く、抽象的。

②具体的にどのような構造化のアイデアが必要かを検討。

- ・ 周囲を気にしていることに対して、作業スペースの場所の向きを少し変えて、周囲をプラダン（プラスチック段ボールシート）や木の柵で囲う。
- ・ どれだけ取り組むのかをわかりやすくするために、わかりにくいポリバケツからカゴ×6に変更して、提示する。

③Xさんに行ってもらい、その様子を評価して再構造化を図る。

- ・ カゴの中の缶が整理されておらず、解りにくいのではという意見がある。
→カゴに紐を張り、缶を入れる枠を作ること、12缶が整理されて入っている状態を作る。
- ・ Xさんの強みである、「数字を知っている」を活用するため、カゴに数字カードをつけ、順番に取り組んでもらう。
- ・ 職員の姿を見ると、確認のための声が出ることがあるため、取り組み中はXさんの視界に入らない場所で見守る。
- ・ 職員の声かけは極力減らし、声をかける際は、具体的に短く伝えるようにする。

④Xさんに行ってもらい、その様子を評価して再構造化を図る。

- ・ カゴに付いた数字を職員が伝え、そのカゴを取ることはできている。職員の介入を減らすために、数字カードで手順の提示を行い、そのカードをとってカゴに付いた数字のポケットにマッチングさせて、カゴを取る方法に変更する。
- ・ カゴの置き方について、縦に積み上げておいた方がわかりやすいのではないかと意見があったが、「数字を知っている」という強みを活かすために、縦積みではなく棚置きにする。

⑤Xさんに行ってもらい、その様子を評価する。

- ・ 缶作業について構造化のアイデアを取り入れることで、自分で缶作業に取り組んでいる。そのため、確認の声はかなり少なくなり、集中できている。

〈アドバイス〉

今回までの勉強会は缶作業について構造化を行ったが、次回からは休憩の過ごし方ということで自立課題を勉強していく。

- なにがあれば過ごせるか。
- 何もなくすごせない人はうろうろしている、自己刺激行動をしている。
- 職員が関わるほどよくない状態になることがあるのは、統一した関わり方ができていないため。職員とのよい関係をめざすのではなく、職員がいなくても自立して動ける環境を作ることをめざすことで、自閉症の人は過ごしやすくなる。
- 過ごせるものを用意することは重要。

3. 自立課題の作成

- ① Xさんの強みを活かした課題を4種類作成。
- ② Xさんに、課題に取り組んでもらい、その様子を評価して、再構造化を図る。
- ③ 複数の領域を取り入れた課題は、難しいようであったため、領域を分けて課題を作成。

Case 13-3

移動が苦手、着替えにこだわり >>> タイマーやカゴの活用

Yさん、男性、30歳代。

- 職員や利用者が多く過ごす大きい部屋で物を気にしたり、動き出しに時間がかかったりする。
- 移動の際、なかなか行動に移せない。活動で行っているドライブや帰りの送迎バスへの移動に時間がかかり、乗れないことが多い。
- 着替えにこだわりが強い。衣類の要求が多く、何度も着脱することがある。服を脱いで要求することがある。

1. 動き出しや移動が必要な際の支援

マイクロバスへの移動や作業の場所への移動など、移動が必要な時は、声かけで行動を促してきた。食事への移動は、声をかけるとすぐに移動に移ることができているが、その他については、声かけをしても行動に移すまでに時間がかかっている。そのため他の利用者より先に予定を伝え、職員が横に付き手を引くなどして促した。しかし、他の利用者が移動して周囲に人がいなくなると行動ができず、結局他の利用者より15～20分ほど遅れて移動を始めることが多かった。また、声をかけて移動を始める前にトイレに行ったり、衣類を着替えたり、その他気になるものを投げる・隠すなどしてから移動を始めるため時間がかかっていた。機嫌がよいときは、一連の流れがスムーズに流れ、すぐに移動することができたり、トイレに行くだけで移動ができたりしている。機嫌が悪い時は、職員の言葉を拾い、「バスに乗ります!」「ドライブ行きます!」などを興奮した口調で言うことがある。このような口調で言っている時は、

なかなか移動できないことが多い。また、興奮して物を投げる、服を脱ぐ、服の要求をして着脱をくり返すという行動が見られる。

〈これまでの支援でわかったこと〉

- ①周囲の人の動きを見て、それを目安に行動している。
- ②周囲の状況や職員の声かけにより、これから移動することは何となく理解している様子。しかし、興奮状態になると何をすべきなのか、何がしたかったのかYさんもわからなくなってしまい移動できなくなってしまう。
- ③Yさんの中で、行動するためのきっかけをつくりにくい。
- ④興味のあること（食事）に対しては、スムーズに行動できる。

〈アドバイス〉

- ・ 場所を自分なりに決めている（全体の動きを見通せる場所）。
- ・ 言葉の理解はできていない（弱い）。
- ・ 物に反応しやすい特性を活かすとよい。
- ・ 現在Yさんが自分の場所として認識しているところに手がかりを置いて認識してもらう（送迎バス座席、ドライブのバス座席、食堂の席、トイレ等）。
- ※手がかり…マーク 写真 ブロック等（評価できめる）
- ・ ポケットマッチングが理想的だが、投げってしまうのであれば貼り付けてもよい
- ・ 意味のないものより名前やYさんの好きなもの、色、写真、キャラクターがよい
- ・ 以前写真提示を行ったとき、注目がいかなかった→マッチングがよい
- ・ 最初は相性のいい職員と現在決まっている席、場所からはじめる
- ・ 手がかりになる物が出たら動く…動くことができている食事場面から始めるとよい
- ・ 手がかりは物だけではなく音も有効
タイマーがなったら動く「なったらいくよ」
開始の合図を決める→なったら動く 出されたら動く
- ・ 行動がつながっていない→食べ終わったら何をする 作業が終わったら何をする
- ・ 何もしない時間はつくらない方がよい→何かつくってあげる
- ・ ソファーに何分座っていられるかを評価
例）休憩→5分間の音楽（ヘッドホンで音楽を聴く、投げるのであればデッキは箱に入れる）
- ・ 休憩を構造化する（落ち着ける時間をつくる）
作業の課題、休憩の課題と分けて自立課題を行うのも良い

2. タイマーの利用

コンサルタントの助言にあった「タイマー」を行動のきっかけに使用した。タイマーはYさんの横などに置いておくと投げてしまうため、職員が持っておき、移動の際に提示した。また、数字の理解や時間の概念がないため、時間の設定はせず、移動の前に約5秒セットし「これ（タイマー）がなったら出発するよ」と伝えて、タイマーを使用。このタイマーの音（電子音）がなると、再度声かけにて移動を促した。タイマー音を合図に行動することを覚えてもらうため、まずは食事への移動から始めた。すぐにタイマー音が行動の合図と理解できたため、マイクロ

バスへの移動の際や作業への移動の際など、移動が必要な時に使用した。

タイマー音がきっかけになっているようで、動き出しはスムーズになった。しかし、バスに乗る際は一連の動作を行っており、スムーズにバスに乗っている状態ではなかった。

3. 今後の支援

タイマーにより動き出しはスムーズになったが、その後の行動に時間がかかっている。よりスムーズに移動できるように、下記の支援を行う。

- ①周囲の人の動きを目安にしていることがあるため、他の利用者が移動している時に、行動を促す。
- ②今から何をするのか伝わるよう、言葉だけでなく、絵や写真で伝える。

〈アドバイス〉

- ・漠然と「あっちに行った、こっちに行った」ではなく、組織的に情報を共有しなければならない。
- ・降園時に行われる1連の動きを1週間程度すべてチェックする。
- ・Yさんが思いつきで動くのではなく、チェックする個所を設定して、それらをすべてチェックした後にバスへ動く道筋を作る。
- ・ドアを閉めに行く前に閉めておくなど職員が先回りして対応しておくとうい。
- ・他の利用者がチェック個所を触ってしまうため、最後にバスへ誘導するのが望ましい。
- ・チェックができるようになるために、ホルダー課題でマッチングができるように練習する。

例) Yさんの顔写真、簡単な絵、マークなど

4. 着替えに関する支援

Yさんから着替えの要求があると、持参した衣類がリュックを渡し自分で衣類を出して選んでもらっていた。しかし、持参した衣類が多く、選択肢が多いと選べないようで、何度も着脱をくり返し興奮状態になっていた。そのため、別の場所にて衣類を保管し、一枚ずつ渡して望む衣類を探してもらった。この方法だと、次の衣類が出てくるまで時間がかかり（別の場所に保管しているため）、それが待てずに興奮状態になることが多い。納得して着る衣類は、先ほどまで着ていて脱いだ服が多く、再度同じ服を着ている。服を着終わると、着ていない残りの服は、投げたりロッカーではないところに隠したりしてしまう。しかし、また着替えの要求はある。

〈これまでの支援でわかったこと〉

- ①選択肢が多いと、混乱する。
- ②要求が強く出ている時は待ち時間に弱い。
- ③不要な服は、片づけたい。この場から消したい。
- ④着替えにより、切り替えをしている。

〈アドバイス〉

- ・着替えが切り替えになっているところがある。
- ・気に入った服がなくて落ち着かないことが多い。
- ・やりとりの場面を構造化する。

カゴに少量ずつ入れて何個か用意し、1つずつ片づけていく

→そのカゴが全部なくなったら終わり

- 気をひくために物をひっくり返すのは、暇だから出る行動。物投げを経験させないことが大切。

5. カゴを利用した選択肢の絞り込み

コンサルタントの助言を受けて、カゴを用意して、その中に同じ種類の衣類を3枚程度入れて渡すようにした。衣類の種類は、Yさんが脱いで渡してくれるため、その脱いだ衣類も含めて渡している。着替え後、残った衣類はすぐに職員が回収して、保管している。

カゴの中の衣類を見て結局同じ衣類を選んでいるが、選択肢が少ないため、2～3回の要求で納得することが多い。

6. 今後の支援

カゴの中の衣類を選ぶ際に、すべてを出して確認していることがあるため、カゴの中身がわかりやすくなるよう、カゴに仕切りを付けてすっきりとさせる。これにより、より選びやすくする。

〈アドバイス〉

- 決めたところに置かないと探しに行くこだわりになってしまう。
- 決められたところに3つだけ補充して、要求があったらそこから出す。
- 好きでそのような行動をしているのではない。まとまらない、何をやっていいかわからない、やりとりを時間の使い方のひとつにしている。
- 衣類を脱ぎっぱなしで着ようとしないうちに、騒いでいる時はそっとしておく。

評価について（第4回・第5回コンサルテーションでのアドバイス）

評価セッションをやる意味

- 本人にとっての手がかりが何かをさぐる。
- 物、写真、声かけ、周りの環境がその人にとって何が有効なのかの確認ができる。
- どう整理するかがわかってくる。
- なんとなくやることはなかなかヒットしないが、本人にヒットするものを早くみつけられる（効果的）。
- 評価セッションは1年間付き合うのと同じぐらいその人のことがわかる。
- 評価は直接観察、家族（入所施設職員）からの聞き取り、前の職員からの聞き取りの3つの場面から行う。

直接観察のポイント

①スキルについて

何ができるか、できないか、できそうか。

②理解レベル

これによって伝え方が変わる。

例）生活場面で「ちょっと待ってて」の言葉かけに待てない場合

- ・意味がわからない or 待てない状況を考える
- ・「むこうで座って」「服ちゃんとして」など色々な言葉かけを試してみる

③得意、不得意

数字、文字、色、作業など様々な物の中から得意なことをみつけ、それを強みとして活かした支援を行う。

構造化（環境調整）の重要性（第4回コンサルテーションでのアドバイス）

- ・自閉症の人は自分で整理することが苦手。
- ・「じゃまだから物をどける」ことができない。
- ・目の前にあるものに反応してしまう。
- ・環境次第でパフォーマンスが変わってくる。
- ・支援者側は本人の力を引き上げようとするが、整理場所が用意されてからでないといけない。場所環境をまず用意することが大切。
- ・つい、環境をあとまわしにしてしまう。
- ・利用者にとって過ごしやすい（わかりやすい）かどうかを考えることが重要（作業場所、食堂、トイレなど）。

PLAN-DO-SEE の重要性（第4回コンサルテーションでのアドバイス）

- ・PLAN-DO-SEE がまわっていけば、よりよいものに近づいていく。
- ・1年間同じことをやっていることが多いのは、プランニングがなく見直しをやっていないため。
- ・プランニングがはっきりしていないと、なにが原因で何が問題かが出てこない。
- ・プランニングがあってそれについての修正をして、結果よかったか悪かったかというプロセスで支援がまわっていく。「付き合えばなんとかなる」ものではなく、計画的に関わって見直していくもの。
- ・支援が停滞しているときは、何か働きかける→結果が何かでる→うまくいけば活かせる→うまく行かなければやり直す。こうして利用者に近づいていくことが大切。

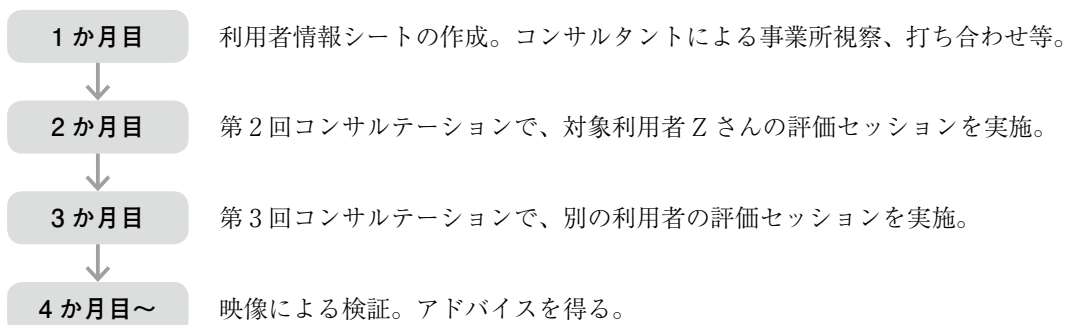
多機能型

ねらい・背景

重症心身障がいのある人、高齢知的障がいのある人、自閉症・行動障がいのある人をはじめ、様々な対応を必要とする重度利用者が多く利用し、専門性を要する支援が求められているなかで、「一人ひとりの利用者評価を踏まえた日中活動の組み立て」など、利用者一人ひとりに応じた適切な支援提供のあり方に行き詰まりを感じていた。また、職員の支援スキル等の未熟さが、障がいのある人に対する虐待行為や人権侵害を招いてしまうという危機感を募らせていた。

そうした背景のなか、職員の支援スキルや専門的知識の向上を図るうえで、コンサルテーション事業を受けて支援現場の実態に対応したコンサルタントを派遣していただき、具体的な助言や指導のもとに「新たな取り組み」を実施した。

流れ



Case

14-1

目標を設定し、伝える・見える・自分からできるワークシステムを構築

Zさん、男性、20歳代。療育手帳A判定、障がい程度区分5、知的障がい（自閉症）。絵を描くことを好み、絵画教室に通っている。特にボールペンを使用して絵や文字を描くことが好きである。絵や文字を描くことで情緒的に安定する傾向がある。

命令口調やダメ等の否定的な言葉かけをはじめ、「強制的な指示」「立て続けた執拗な指示」「理解面で混乱するような長い話し言葉での複雑な指示」等は嫌いである。また、急なスケジュール変更や興味関心のない活動への参加は苦手である。それらの嫌いなことや苦手が引き金となり、自傷行為又は他傷行為につながる傾向がある。

声かけや指示等の受け入れを拒否する場合は、Zさんからの意思伝達サインとして「や

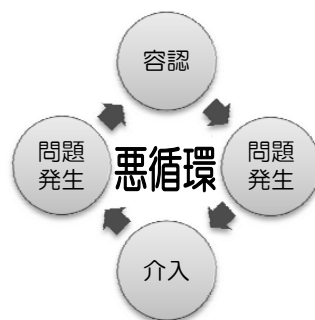
めとく」という発言がある。その発言の際に執拗な指示や強制的な参加を促すと、パニックに陥って自傷行為又は他傷行為につながる傾向がある。

1. 支援の実態と課題

Zさんは日中活動の一つひとつの場面において、職員の声かけや指示等が受け入れられないときは“やめとく”という拒否的な言葉を強い口調で発し、場合によっては「行動停止の状態が長く続くケース」も少なからずあるなかで、「次の行動へ切り替えられない」という問題が支援上の重点課題として痛感していた。実際、職員の対応としては、自己決定や自己選択という観点から“やめとく”を「本人が選んだ」又は「嫌だから仕方がない」と容認し、情緒的に安定してZさんが好む「ボールペン」を“とりあえず提供する対応”が常態化していた。

また、一旦「ボールペン」をはじめると「止められない」又は「終われない」という派生的な問題が出現するなど、結果的に介入せざるを得ない状況が生まれ、延いてはZさんの気分を阻害して他傷行為という問題行動に至ってしまうケースも少なからずあった。

このように拒否的発言の根本原因を置き去りにしたまま、その場しのぎや場当たり的に「容認」あるいは「介入」をくり返すバラバラな対応によって、知らず知らずのうちに悪循環の構図に陥り（右）、結果的に“やめとく”がエスカレートして次の行動への切り替えが困難な傾向が見受けられるなど、Zさんへの対応に行き詰まりを感じていたというのが実状であった。



2. 実施目的

「安心して主体的に活動できる環境づくり」を目指して地道に推進する。

→その人なりに少しでも自らの意思や判断で行動して自信に結び付けられるよう側面的に援助することなど、「その人なりの自立支援」を目指しながら、行動の見通しを持って安心して活動に取り組める環境づくりを地道に推進する。

3. 実施目標

目的を具現化するため、「重点実施目標」を支援ベースとしたチーム支援目標「3化指針」(右)を設定した。

4. 「自分から化」の取り組み

〈従来の対応〉

作業中は常にZさんの真横や真正面に配置しながら、お節介的に必要以上の声かけや指示を出す過干渉的対応に陥っていた。また、材料の提供についてもZさんの前に多量に置きながら材料が無くなる前に材料を継ぎ足すなど、始まりと終わりが全く見えない又は先の見通しが持てない作業方法に陥っていた。

■視覚の手掛かりを提供する 「視覚認知は強い」という特性を理解し、物事が一目瞭然にわかりやすく伝わるよう視覚的な手掛かりを提供する具体的アプローチを実践する。	■具体的でわかりやすい声かけ 「ちょっと」「あれ」「これ」など、抽象的で曖昧な声かけのアプローチは行わないよう意識化し、具体的に簡潔明瞭な声かけを実践する。
伝わっています化	
■「場」の固定化とシンプル化 準備や片付けを行う上で明確にわかりやすく取り組めるよう場の固定化を図り、視覚的な散らかりでストレスが生じないよう場のシンプル化を図る。	■伝える支援から伝わる支援へ 一方通行的な支援者目線の「伝える支援」に陥らないよう意識化し、相手を思いやる利用者目線の「伝わる支援」へと改善する。
■スケジュール提示の改善 大切な日中活動の場を見通しをもって安心して過ごせるよう、利用者の特性を踏まえながら日課の流れを視覚的にわかりやすく伝わるスケジュール提示へと改善する。	■事前説明の機会を設ける 一つひとつの活動に際してはメリハリをつけると共に、行動の見通しが持てるよう活動前には具体的にわかりやすい事前説明を実践する。
見える化	
■安定的な日課の提供 急なスケジュールの変更をはじめ、場当たりの日課の提供に陥らないよう、計画性を伴った安定的な日課の提供を実践する。	■タイマーの限定使用 楽しみの時間帯である昼休みから午後の活動への切り替えがスムーズに出来るよう、昼休みの終わりを明確に伝わる取り組みとして実施する。
■主体的に活動できる機会を増やす 「ワークシステム」等の主体的に活動できる機会を通じて、自信につなげるために必要な経験を積み重ねながら「活動の始まりと終わりを理解すること」や「次の行動へ切り替えること」など、他人へ過度に依存することなく、その人なりの自立に結び付けられるよう側面的に援助する。	■その人らしさを助長する 「何が出来ないのか」又は「出来ないことを出来るようにする」というような短所面に焦点化する支援ではなく、その人らしく生き生きと取り組めることを助長するなど、その人らしいストレングスを引き出せるような長所面に焦点化する支援を実践する。
自分から化	
■声かけのフェードアウト 指示待ちの状態にある場合などは声かけを徐々に少なくし、自発的な行動へ結び付けていけるよう援助する。	■過干渉のフェードアウト 自発的な行動を妨げ、意欲の減退につながるような過度なお節制的アプローチに陥らないよう意識化し、主体性を重んじた側面的援助を実践する。

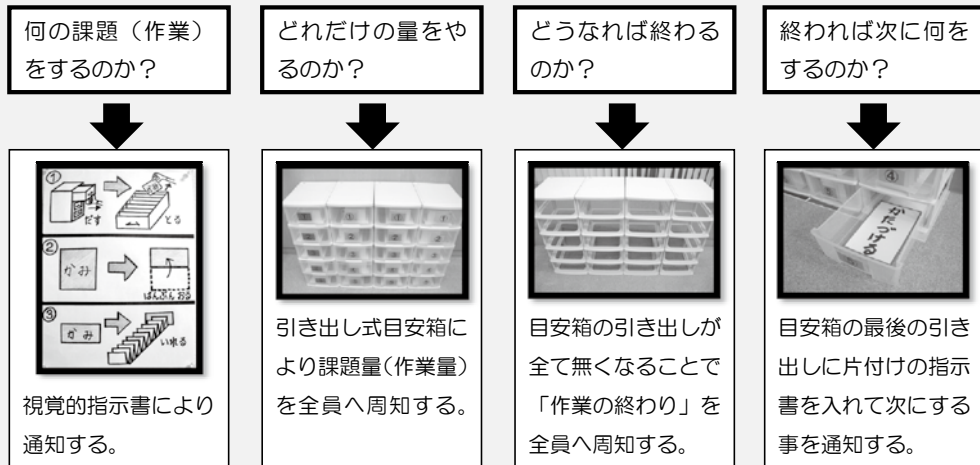
〈Zさんの様子〉

作業前は「やめとく」との拒否的な発言が少なからずあった。作業中は必要以上の声かけや指示により理解面での混乱を招き、場合によっては職員や隣席の利用者を叩く行為に至ってしまうことも少なくなかった。また、他の利用者の対応に追われて待ち時間が多くなったときには、退席行動や机の上に顔を埋める行為をはじめ、場合によっては材料を破く行為や嘔む行為などの問題行動へとつながりやすい傾向にあった。

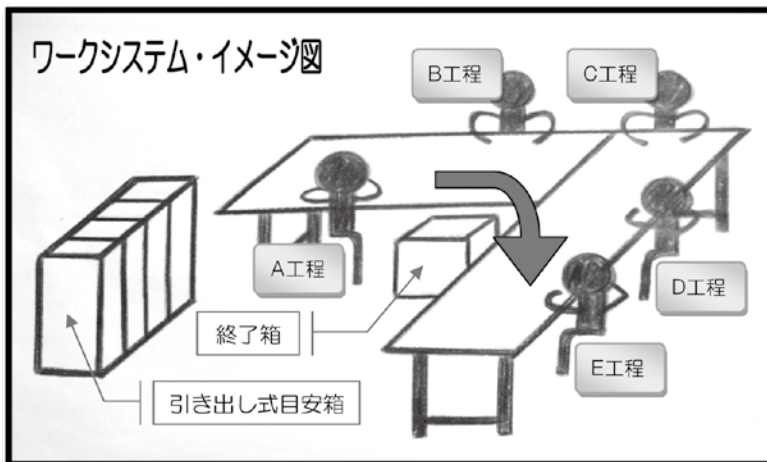
〈新たな対応〉

作業中は、Zさんの真横や真正面に誰も配置しない体制を徹底すると共に、声かけも必要ないとき以外は全く行わないなど、自主性や主体性を尊重した見守り対応を原則として取り組んで

■ “ワークシステム4つの基本情報” わかりやすい形で伝わる工夫



〈ワークシステムを活用した作業活動の全体像〉



作業例：自立課題（模擬的事務作業）



いる。また、作業方法に関しても、職員がなるべく関わらないシステム（ワークシステム）を導入し、一つひとつの作業に区切りをつけながら始まりと終わりが明確に見えるよう配慮するなど、主体的に作業ができるよう支援している（上）。

〈Zさんの様子〉

作業前の「やめとく」という拒否的な発言がなくなると共に、作業中における問題行動（叩く行為や材料を破損する行為など）も一切なくなっている。また、作業中は自発的な言動や意欲的な姿勢が見受けられると共に、多少の退席行動はあるものの一時間ほど集中して作業に取り組んでいる。

〈考察〉

「退席することなく一時間ほど集中して取り組んでいる実態」や「片づけをスムーズに取り組んでいる実態」には目を見張るものがあり、ワークシステムの成果を実感している。特に作業後の「片づけ」に関しては、自発性の向上も垣間見ることができると、「片づけのスケジュール化」の大切さを職員間で実感できたことは今後につながる貴重な経験となった。

4. 「見える化」の取り組み

〈スケジュール提示の見直しのポイント〉

- ①「アナログ時計は読めない」との検証結果を踏まえる。
- ②「数字に強い」という特長を活かす。
- ③通所直後のスケジュールと系統化して実施する。
- ④昼休みの時間帯に限り、タイマーを限定使用する。
- ⑤始まりが明確に伝わるよう「いまのかつどうボード」を使用する。
- ⑥終わりが明確に伝わるよう「終了箱」を使用する。



従来のスケジュールボード



新たなスケジュールボード

〈通所直後のスケジュール対応課題の背景〉

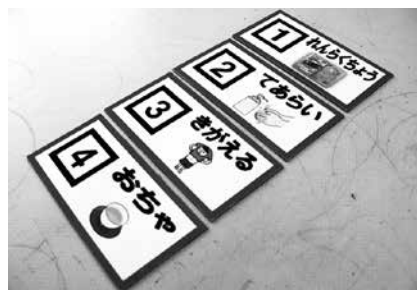
日々の睡眠が悪い状態にあるZさんは、眠たそうな表情で机の上に顔を埋めている様子が度々見受けられる。その場合、なかなか次の行動へ切り替えることができない傾向にある。

特に、通所直後はその傾向が目立ち、このときに場当たり的な対応で必要以上の声かけや立て続けて指示を出すと「やめとく」という拒否的な発言につながる傾向が強く、通所直後に行う「手洗い」及び「着替え」はその典型的なケースであった。

また、対応によっては事態が悪化して「他傷行為に至るケース」や「行動停止の状態が長く続くケース」も少なからずあるなかで、その後の日中活動の取り組みに支障をきたすなど、通所直後のスケジュールに関する場当たり的な対応面が「当面の重点課題」として痛感していた。

〈新たな対応〉

自発的行動に結び付けられるような対応を検討してきたなかで、Zさんの通所直後において自発的行動の糸口となるスケジュールカード4枚（右：通所直後における一連の行動の流れを固定化するカード）を直接Zさんの目の前（机上）で提示する方法を試みた。また、声かけも必要なとき以外は全く行わないなど自主性や主体性を尊重した見守り対応を原則として取り組むなど、職員間で統一したチームアプローチを徹底している。なお、一連の行動の流れを示す番号表示についてもスケジュールボードと関連性を持たせながら系統化している。



〈Zさんの様子〉

拒否的な発言は一切なくなると同時に、目の前に提示されたカードが気になる様子が見受けられ、結果的に自発的な行動に結び付いている。最初にカードを目の前に提示することで自発的な行動のきっかけとなっているように感じられる。

〈考察〉

「アナログ時計は読めない」との評価セッションの検証結果を通じて、支援者として観察力の甘さを痛感し、普段から思慮深く観察することの大切さを再認識する機会となった。

また、終わりの伝え方に関しても、カードを裏返すよりも、終わったカードを取り外すなど、「無くなれば終わり」という単純明快な仕組みの方がZさんにとってわかりやすいように感じられ、その人の特性に応じた提示方法の大切さを学ぶ機会となった。

5. 「伝わっています化」の取り組み

〈作業活動に関する取り組み〉

「引き出し式目安箱の片づけに関する取り組み方」として、指定する片づけ場所の床上に色分けしたボード4枚を敷き詰める工夫を凝らして視覚的明瞭化を図るなど、視覚的な手掛かりを提供する具体的援助を実践している（右）。

〈考察〉

視覚的明瞭化を図ったことで、Zさんは躊躇することなくスムーズな流れで目安箱の片づけを行っており、改めて視覚的な手掛かりを提供する具体的援助がZさんにとって受け入れやすい傾向にあることを実感すると共に、引き出し式目安箱一つひとつの片づけの場がZさんへわかりやすく伝わっているものと感じられた。

〈洗濯実習に関する取り組み〉

洗濯実習を支援提供（日中活動の場で着用している活動着を洗濯する）しているなかで、洗濯行為の一連の流れを一目瞭然にわかりやすく伝わるように「写真カード手順書」を作成するなど、視覚的な手掛かりを提供する具体的援助を実践している（下）。

〈考察〉

Zさんにとって洗濯は興味関心のない活動ではあるものの、「実施日の固定化」や「写真カード手順書」の提供をはじめ、行動の見通しがわかりやすく伝わるよう「やるべきことの明確化」



を図ることで、躊躇することなくスムーズな流れで実習に取り組んでいる実態が見受けられている。

また、Zさんは「なぜ洗濯するのか？」という理解面では困難な実状にあるが、活動行為自体は概ね器用に取り組めている様子が見受けられるため、理解面での支援を先行させるのではなく、まずは活動を通じた一つひとつの行為面でのスキルアップを目指すなど、長所面を助長する支援の在り方が大切であるように感じている。

ふりかえり・まとめ

Zさんの現時点における様子としては、行動の見通しをもって大変落ち着いた様子で活動に取り組んでいる。また、“やめとく”という拒否の発言に関しても激減し、次の活動への切り替えも概ねスムーズに行っている。そうした現状を踏まえて考えると、「Zさんが選んだ本当の意味での自己選択」というよりも、見通しがなく不安が強い状態のなかで“やめとく”と言わざるを得なかったのではないかと推察すると共に、“やめとく”は「どうにかしてほしい」という叫び（SOS）のようにも感じられ、「本人が選んだ」又は「嫌だから仕方がない」など、これまでの“やめとく”に対する捉え方のありようを痛感している。

この痛感した思いを今後の支援に活かしていくために必要な要素として、まず支援者一人ひとりが、これまでの固着した考え方を拭い去り、「新たな視点から物事を見つめ直す作業」からはじめてみるような柔軟さが不可欠であるように考える。

例えば、事例で示す取り組みにおいて、「アナログ式の時計が読めない」との評価セッションの検証結果を踏まえて新たなスケジュールボードを導入した経緯があるなかで、「よかれと思ってしてきたことが、実は相手にとってみれば大きなお世話であったのかもしれない」という思いが生じ、つくづく「支援とお節介は紙一重」であると身にしみて感じると同時に、物事に対する捉え方を常日頃から意識化する必要性を感じた。物事の捉え方は、同じ物事でも人によって見方や感じ方が異なり、ある角度から見ると長所にもなり短所にもなる特徴がある。それ故に、捉え方によって進むべき方向性の分水嶺となり得るため、支援を展開する上で極めて重要なプロセスであると考えている。

従って、その支援に対する捉え方次第で、「支援の幅」や「サービス選択肢の幅」を狭めてしまう恐れがあり、ひいては、その人の生活や人生が大きく左右される危険性を伴うため、専門職として新たな視点から日々実践している支援を見つめ直し、問題解決の糸口を見出せるよう「何故？」という意識をもって支援に当たることが大切であると実感する。

Zさんの事例を通じて、様々な面で改善されつつある状況にあるが、「安心して主体的に活動できる環境づくり」を目指す上ではまだまだ不十分であり依然として課題が山積している。しかしながら、チームの一員として同じ方向性や同じ情報を共有しながら、「現状をよりよくしていこう」という建設的な考え方を支援者間で分かち合う姿勢が見受けられるなど、徐々にではあるが支援者一人ひとりの意識が変わりつつあることが何よりの成果であると実感している。

今後の課題としては、新たな取り組みを“常態化した取り組み”として定着できるよう継続し

ていくことが大切であると同時に、忙しい業務のなかで知らず知らずのうちに「虐待や人権侵害の加害者」に陥らないよう、自らの援助姿勢を定期的に再点検することが重要であると感じている。

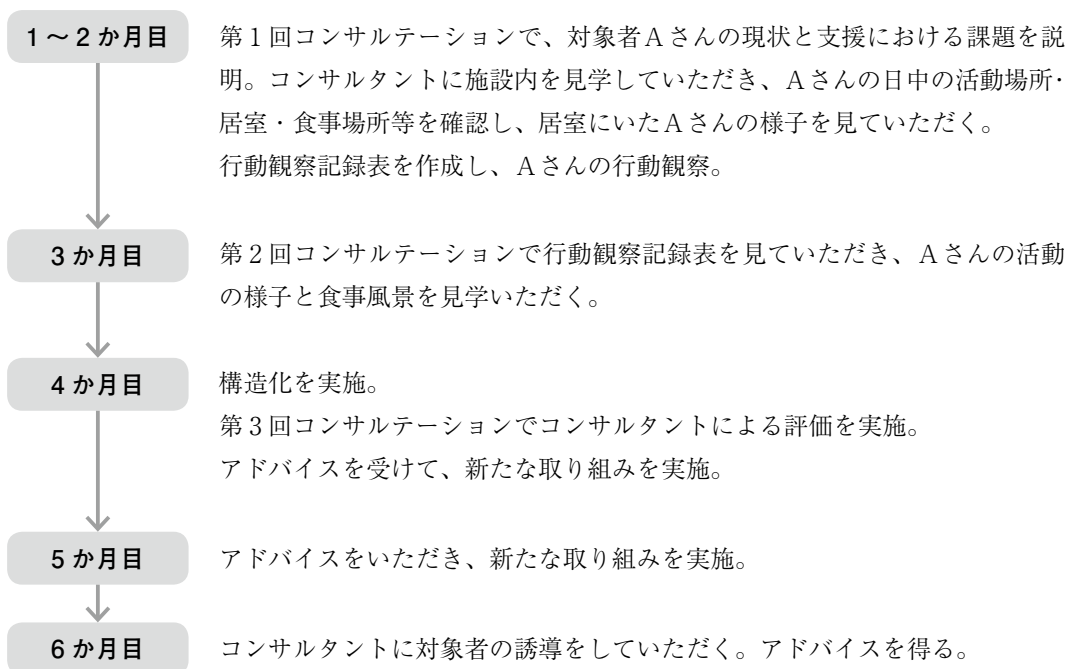
そのためには、利用者目線に立ち、日々実践している“何気ないアプローチ”を相手の身になって見つめ直してみることが、目に見えない「虐待」や「人権侵害」を未然に防止し、「利用者の叫び“SOS”」に気付く第一歩であるように実感している。

障害者支援施設／生活介護

ねらい・背景

施設開設5周年を迎え、更なる職員の支援の質向上を目的とし、個別利用者に対する環境整備や特性理解及び、職員のスキルアップ支援をねらいとした。

流れ



Case
15-1

行動観察と本人評価からスケジュールを作りワークシステムを導入

Aさん、男性、30歳代。

- ・フロアから活動場所への移動がスムーズにできず、活動に参加できないことがある。
- ・活動場所へ移動しても、何もせずに座っていることが多い。
- ・入浴について、浴室へ行くまで時間がかかったり、浴室内でも洗身や湯船につかる時間が長くなることもある。
- ・外泊時、あらかじめ事前に予定を伝えているが「帰りません」と拒否し、父が迎えに

来ていても帰宅できないことがある。

- ・ 行動場面において、動作が止まり、次の行動に移れないことがある。

1. 第1回コンサルテーション

〈アドバイス〉

- ・ 場面の切り替えが困難で、見通しが持てにくい（始まり・終わりがわかりにくい）のではないかな。
- ・ 活動場所への移動ができない理由を探る必要がある。「行動観察記録」（移動できる時とできない時の違いをみる・外泊前なのか・職員によるのか・活動内容によるのか）をとってみてはどうかと提案していただく。
- ・ あまり本人とやりとりをしすぎず、こちらがして欲しいことをきちんと伝える。
例）「〇〇しますか？」ではなく、「〇〇してください」
- ・ 言葉でのやりとりは、理解できているようでできていないことが多いため、活動内容を伝える時は具体的に、わかりやすい方法で伝えるほうがよい。
- ・ Aさんの担当職員にも参加してもらったほうがよい。

〈その後の取り組み〉

- ・ 行動観察記録表を作成し、Aさんの行動観察を行った。（その後も継続）
- ・ 活動時の声かけを「〇〇しますか？」から、「〇〇してください」と変更し、特に行動が止まりやすい場面の声かけで具体的に説明するよう心がけ、Aさんの行動を観察した。これにより、スムーズに行動できる頻度が増えた。

2. 第2回コンサルテーション

〈アドバイス〉

- ・ 行動観察記録から、場面の切り替え時に行動停止がみられ、この切り替えが苦手なことが分析できる。
- ・ 記録表を記述式にしているが、チェック方式にする等、簡略化したほうがわかりやすい。
- ・ 活動場所について、視覚的刺激が多く、机の向きを変える、衝立を置く等、環境を整える必要がある。
- ・ 食事環境について、見通しのよすぎる場所で食べているので、壁に向かって食べる等の工夫が必要ではないか。

〈その後の取り組み〉

- ・ 行動観察記録表について、記述式からチェック方式に様式を変更した。
- ・ 活動場所の環境整備について、活動班の職員で話し合い、他の利用者と共用の机を個人用にして窓側に設置、衝立を使用して構造化を実施した。
- ・ Aさんの変化として、他の刺激が減少したことで、活動中に手を止めることが少なくなった。

3. 第3回コンサルテーション（コンサルタントによるAさん評価の実施）

〈評価結果〉

- 切り替えが弱い、特に言葉での切り替えは難しい。
- 文字は読むが意味を理解していない。
- 絵も全体を見て判断するのではなく、ひとつの物に焦点をあてる、単語に引っ張られる傾向がある。
- カードで伝える・書いて伝える方がAさんにより伝わる。
- 自分で選ぶことができない。
- 全体的に受け身（自ら動かず言われたら動く）。
- 困った時に困ったと表現できない（言えない）。
- 判らないのに答えを要求される等、上手くいかないと行動停止・やりたくない時も行動停止。
- 「〇〇してください」と、わかりやすく伝えることが大切。
- 見通しがあれば動きやすいので、きちんとした日課を組んでわかりやすく伝えることが重要。
- カレンダーを理解できていない様子なので、終了したら消していくなど視覚的に伝える。
- 帰省の予定は、時間も伝える。

例）「おやつを食べたら家に帰る」などAさんにわかりやすいように示す。

- 1日ずつのスケジュールを用意して帰省日のスケジュールには、おやつの上に「帰る」と入れるなどわかりやすくする工夫が必要。
- スケジュールは、絵と文字で示すのがよいのではないか。
- タイマー使用を検討してみてもどうか。

〈その後の取り組み〉

- 1週間分のカレンダーを作成し、マグネットで当日を示し、視覚的にスケジュールの見通しが立てられるようにした。
- 活動場面で、ワークシステムを導入した。

4. 第4回コンサルテーション

〈アドバイス〉

- ワークシステム導入時はマンツーマンでつき、後ろから手を添えて教えること。
- Aさんは、色々なことが我流になりやすい人のようなので、カードの取り扱いは職員が付いて教える必要がある。
- 課題をしないのはできないからしない可能性があるなので、特にシステム導入時は評価していない課題は使用しない。
- 課題の量が、集中できる量であるか検討することも大切。
- 課題をしない→「やらないなら変えます」等、職員とAさんがやりとりしないで、何故しないのかを検討することが重要である。
- ワークシステムは2～3セット用意して覚えてもらうとよい。

例）課題→休憩→課題→休憩→課題→休憩

- 課題を行う場所と休憩場所を分ける。

- マニュアルを作成し、対応職員を絞り、統一した支援を行うほうがよい。



◎目標（今の時間はこれをやってもらう時間）を決めて、その流れに添ってやってもらうことが大切

◎きちんとやりきってもらうことを用意することが大切

- 帰省に関して、「帰りません」は見通しがつかず、不安から発する言葉の可能性がある。Aさんが理解できるカレンダーを用意した方がよい。
- 1週間ごとのカレンダーを用意し（帰宅がない週も実施）「今日はここ」とマークをつける。
- 1日が終わったら消していく等、カレンダーをチェックするタイミングを統一して行う。
- 見通しを立てるため、個別の1日の予定をカレンダーに記入するのもよい。

〈その後の取り組み〉

- 活動中における休憩と課題を行う場所を分けて、取り組みを実施した。
- タイマーを使用し、休憩時や活動終了時にタイマーをセットしてAさんにスタートを押してもらうよう声かけやジェスチャーで対応したが、できる時とできない時がある。タイマー終了で次の行動に移ることができる時とできない時がある。
- 課題内容の見直しを行い、確実にできる課題を用意することで、スムーズに課題を行うことができた。
- 場面の切り替え（移動）時、写真カードを使用。
- 帰省について、視覚的に知らせることができるよう週間カレンダーを作成し、実施した。

5. 第5回コンサルテーション（コンサルタントによるAさんの移動誘導）

〈アドバイス〉

- 誘導する際は、自分で移動していると感じてもらうため、Aさんに前を歩いてもらうこと。
- ワークシステムの中にスケジュールも混在している状態のため、分ける必要がある。
- 日中活動の場面からスケジュールの取り扱いを覚えてもらうほうがよいのではないか。
- 課題の量は、もっと増やす必要がある。
- 課題は、一度にたくさん提示しないこと。
- 座席への移動はできるだけ刺激のないところを通るように導線を検討する。
- 手を止めて課題が時間内に終わらない時は、先の課題を省略する。
- 番号でのマッチングができているか判断しにくいので、課題の番号は順番通りに並べないほうがよい。
- 拘りになる可能性があるので、課題と番号は固定しないほうがよい。
- 帰省カレンダーのマグネットは、Aさんに自分で移動してもらうほうがよい。
- 言葉でやり取りすると「帰りません」など、気持ちとは違うことを言うてしまうことがあるので、言葉でのやりとりをせずに行うこと。
- 移動時のカードの使用について、現在のカードの写真が、その場所や意味を理解できるものであるか見極める必要がある。